市浪遺稿

258
793

084915-000-8

特22-179

市浪遺稿

大脇　市浪／著

M41

DBB-0195

特22
179

故大脇市浪君

瀧川伊三郎

君は明治十八年十二月二十一日大阪市淡路町の商家に生れ、長するに及び中等の學を修む、性優なれども克く事物の難に堪へ、友に交るに誠意人と爭ひし事なし、歸りては父業に從事し、恒に又事業に熱心、北海道に農場を經營し家業に勵勉せり、遑なき餘暇深く文學に趣味を有しき、寔に商家の人として雅致富有の君なりしを、俄然病沒悼しい哉。

明治四十一年三月十六日

君は明治十八年十二月二十一日大阪市淡路町の商家に生れ、長ずるに及び中等の學を修む、性優なれども克く事物の難に堪へ、友に交るに誠意人と爭ひし事なし、歸りては父業に從事し、恒に父事業に熱心、北海道に農場を經營し家業に勵勉せり、道なき餘暇深く文學に趣味を有しき、寔に商家の人として雅致富有の君なりしを、俄然病沒悼しい哉、

明治四十一年三月十六日

市浪貴遺稿

はしがき

死は何者にも痛事である。

吾等は今更の如く死の痛事なる言葉を繰り反す、否新に深く感じたのである。

死は自然の陶汰とは云へ、夭死が自然陶汰に屬す可き[illegible]ものであろうか。

然り自然陶汰に屬す可きであると答へるより外仕方がないのである、左うすれば痛事の尤も大なるものである、茲に新に感じた事を誰も怪まないであろう、だが何う考へても凡夫だから自然陶汰が恨めしいのである。あゝ市浪君、市浪君、幾度名を空中に呼んだか知れない、が唯空氣を震動さしてその波動を虚穹に傳へるだけで、應ずるものはないのである。何うかして床しい君が名を呼びたいのである。吾等と志を幾分か等しうする人と共に名を永久心に刻みたいと思ふのである、亦市浪君の妙じき遺業の響を傳へたいと思ふのである、茲に市浪君の遺稿を集めて「市浪遺稿」と題し墓前に捧げて吾等自らもせめてもの心やりにせんと云爾

明治四十一年七月

編者一同識

目次

出會頭……一頁
不二山初目みゐ……十一頁
過ぎし天長節を懷ふ……十五頁
初醉……二十四頁
棚の達摩……三十頁
土流砂し……四十六頁
安心……五十九頁
客待車夫……六十七頁
エンゼル違ひ……七十六頁
太郎の返辭……八十四頁
病室……九十三頁
猿太夫と犬吉……百〇五頁
一夜の嵐……百三十四頁
半獸主義……百四十二頁

新體詩

平和の劍……百七十五頁
虹霓……百七十六頁
落日……百七十八頁
花守……百八十一頁
とひらひ……百八十三頁
何？……百八十五頁
蓄音機……百八十六頁
貧乏德利……百八十八頁
感謝……百八十九頁
夜の音……百九十一頁
電線……百九十三頁

出會頭

故 大脇市浪

□「ヤアー！」

○「ヤアー！」

□「○○君ぢやないか。」

○「オー□□若か！」

□「久濶く遇はなかつたねゐ。」

○「相變らず御壯健で結構だ。」

□「君は中々太つたねゐ。」

○「アハヽヽ太るのは身體許りさ！」

□「何處か衰弱いのか。」

○「いや、弱いとも弱いとも大弱りさ！」

□「だッて別に弱いやうにも見えないぢやないか……？」

○「ポケットよ。」

□「ポケット？ハヽヽヽ、ポケットの弱いのは君獨りぢやないよ。」

○「何か一攫千金てなことはないかと思つて、鵜の目鷹の目で探してゐるが、中々旨く見當らないものだ！」

□「濡手で粟の掴み取りは全く六ケしいよ。」

○「何うも社會が狡猾くていけない！」

□「社會が狡猾いのぢやあるまい！君が狡猾いのだらう」

○「さうだらうか、僕はさうとは信じないがねえ！早く社會主義になれば可い！」

□「ハヽヽ、さうなりや金持こそ可い面の皮だ。然し君は今何を爲しつゝあるんだね」

○「別に何も爲ちやゐないよ」

□「ぢやあ依然として親の脛囓りかねえ？」

○「脛囓りとは慘酷だねえ！」

□「飯より好な小説は何うした？相變らず讀むでゐるかい」

○「此頃は姑く中止だよ。」

□「君が中止とは妙だねえ！よく雨が降らないことだ。」

○「そりや讀みたいのは山々だが、此頃の小説を見たまへ！馬鹿に値が高いぢやないか」

□「クロース金文字入定價金八十錢か。」

○「驚くよ、それで內容はと言や、陳腐かんぷん猫の糞で、見られたもんぢやないさ！畢竟內容の拙いのを表裝で胡魔かすのだねえ！」

□「全く！錦の袋に犬の糞と同一だ。」

○「僕大に議論なき能はずだが、未だ發表する機會がない」

□「ないのぢやあるまい、掲せてくれないのだらう」
○「餘りに深く詰るべからず。……加ふるに……。」
□「蘊中無一文を以てす、か。」
○「豈……。ハヽヽヽヽ。」
□「ハヽヽヽヽ。」
○「時に君は何をしてゐる？」
□「マーチャントよ。」
○「だらうと思つた、角帶に前掛と來てゐらあ。」
□「よく似合ふだらう？」
○「何んだかくすぐつたいやうな風だねゑ。」
□「ハヽヽ、大に然り、君の烱眼には感心した。」
○「感心で思ひ出したが、君の隣りの美人は何うした」

□「美人とは！」
○「それ、感心に旨いコロリンシャンの口よ。」
□「フヽヽヽ、あれか。」
○「まだゐるかねゑ？」
□「居るよ、思召があると見ゑるねゑ」
○「大ありさ！」
□「君は見たことがあるかねゑ」
○「ナニ見たことはないが、琴の音の艶なので大底想像がつくだらうぢやないか。」
□「所謂見ぬ戀に憧れたと言ふ奴だねゑ」
○「そこが詩的な所さ」
□「ハヽヽ、流石詩人は違つたものだ、一度御紹介の勞を取らうかねゑ」
○「お願ひ申したいねゑ。」

□「新體詩の艶書（ラヴレター）でも書き給へ」

○「承知した。」

□「だが驚き給ふな」

○「何故だい？」

□「其御面相と來た日にやア……。」

○「美くはないかねね？」

□「君の想像とは少し許り……。」

○「違つてゐるか。」

□「お出額（でこ）の、痘痕（あばた）の……。」

○「オヤ〳〵。」

□「燒豆腐を握り潰したやうに黑と白との鹿の子になつてゐる。」

○「ワハ、、、、所謂ブチだねね。然し本當かねね。」

□「嘘を言ふものか。」

○「冗談だらう？」

□「本當だよ、斷じて嘘は言はんよ。」

○「オヤ〳〵。呆れざるを得んねね」

□「三年越の戀も醒め果てたらう」

○「何うもわの音色が、そんな主からとは思へん！」

□「さう思ふのも無理はないさ！」

○「造化の神の惡戯もこゝに到つて極まれりだねね」

□「其癖母を見りや昔の面影の偲ばるゝ程がだねね、何うも旨くは行かぬものさ、進化論の逆戻り、退化論の絶好モデル、尻が大きくて足が短い……。」

○「ハ、、、恰で家鴨のやうだ。」

□「お負に髪は縮れ毛と來てゐる」

○「もう澤山だ！」

□「鰹茶袴を履いてテク〳〵歩く後姿つたらない。」

○「まだそんなのかねゑ？」

□「宛然、袴の化物宜しくだ。」

○「もう、可いよ。」

□「それでも御紹介申し上やうか？」

○「もう可い〳〵。」

□「ハ、、、、、閉口したねゑ。」

○「そんな動物の紹介されたら虫が出るよ。」

□「ハ、、、、。」

○「お蔭で數年來腹の中で繙まりつゝあつたムシヤクシヤが洗ふやうに取れたよ。」

□「ハ、、、これ許りは流石の君の烱眼も外れたねゑ！小説の材料にも、ちと成り憎

い。」

○「失敗々々！」

□「流石詩人は違つたもんだ！」

○「馬鹿にしちゃ可かん、時にもう何時だねゑ」

□「ヤーもう五時だよ。」

○「どれ、歸つて拙い詩でも考へやうか。」

□「僕も失敬せう、四つ角の一時間大に面白かつた。」

○「ぢや失敬せう、君ちと遊びに來てくれ玉へ！舊交を温めやうぢやないか。」

□「可からう。僕ん所へも來てくれ玉へ！知つてるだらう」

○「よく知つてゐるよ。」

□「今の件でか。今頃なら丁度好な琴の音も聞ゑるよ。」

○「イヤハヤ、眞平、ぢや失敬！」

□「ヤ、失敬……オイ君！」

○「何だ？」

□「後を向いて見たまへ！今のが來るよ。」

○「眞平だ〳〵。」

俥夫「ヤイ馬鹿ッ、危ねぢやねえか、氣を付けやがれッ、間抜め！」

○「ホイ〳〵。」

□「ハ、、、、。」

（明治三十九年五月十五日新潮所載）

萬象の寢息凝りても狹霧する　市浪

白々あけの夢の一時

不二山初目みる

不二！富士！何ぞその名の美にして優なる！何ぞその容の嚴然として古武士の概ある！

吾は不二山に緣遠き關西の人、幼時よりこの伶人……(?)然り伶人なり。日本に不二の名あるを遠き海外の果までも喧傳せしめし點に於て、一種無音の樂を奏する音樂の名手にあらずや。吾この伶人を所謂見ぬ戀に憧れつ、煩悶すること日夜……も、ちと大層なれど、せめて一目なりとも見まほしき眞情は、吾六疊にある悪額の不二を見るにつけても敬慕の念止みがたく、數年間獨り思ひに耽る折しもあれ、遂に天は機會を與ふるを惜まず、幸運は吾を迎へぬ。そは、われある希望を懷きて北海道に赴くべき道すがらなりき、東海道を駛る列車の濱松附近(?)に來りし頃より、群がる山々を歷して小さく朧げながら現はれ出たるは、何！多年渴仰しておかざりし、あゝその伶

人の面影にあらずや、摺鉢を伏せたるが如しと傳へ聞きにし不二とや稱ふなる靈山にあらずや、羅(うすもの)を懸けたるが如きその姿の如何に崇高(けだか)かりしよ。平常餘り事物に感動せぬ冷淡なる頭腦を持てる吾も、流石にこの刹那のみは、いひ知らぬ快味を覺ゆると同時に、感嘆の餘り、冷氣の身に迫るを覺らざりき。

孰れ三五の時の間には、何うでも近寄り得べき身なりしも其時の待遠しくて、鞄を開きて取り出でたるは、言はずもかなの双眼鏡、執る手遲しと眼に當つれば、現はれたりな！嵩き姿は彌(いや)近けれど、にくや、四枚玉の双眼鏡、壞(こは)れよとまで延ばせしも、只僅に大きく見ゆしのみ、吾が失望いはん方なかりき。

此場合列車の進行の如何に遲々たりしかを想ひ玉へ！

然れども、吾は遂に双眼鏡を放つこと能はず、右に、時に左に一歩〳〵接近し來る不二の峯を眺めつゝ御殿場驛に着せし時、吾は宛然として天を摩するなるその雄姿を車窓より仰ぎ、而して白雲か、さては長き壽を表示したる紀念の白髮か、とも見凝ふべ

き白雪の山頂に皚々として積れるを見し時の吾想ひの如何なりしかは、拙きわれの、いはんとして言ひ得ず、描かんとして書き能はざる範圍なれば、今は却つて何事をも申すまじ、只讀者の想像の馳するに任さんか。後新紙を開きて吾いたくその幸福を喜びぬ、此日卽ち明治三十六年九月二十七日は不二の高嶺に於ける初雪なりしことを。

それより吾は東都に入り數日の閑を得て、諸所を見物の折、向島言問ひ團子の二階より、不圖、隅田川を隔だてゝ、遙に遠く霞める不二を見るに及びて、感慨いよゝ深きものありき。

かくて吾れ、北海道に向ふの途中三景の一なる松島をも見たりしが、唯せしてましく小島の散在せるものとのみ思ひて、何等深き感興も湧かず、印象をも殘さざりき。

翌年故郷に歸るの途中は急げる旅の、生憎御殿場沼津も闇の中に過ぎ去りて、懷しき靈姿を再び仰ぐこと能はず。爾來三年、不二登山の志望漸く惱裡に閃けど、吾れ今職業に忙はしくして餘暇を得ず、然れども尙若くして青春の血潮燃ゆる身の如何でこの

まゝおめ〳〵と止むことあらんや、二度とは言はざれ、せめて一度は宿志を果さずんばあらず。

あゝ懇しき哉、不二の雄姿！

（明治三十九年八月十五日文庫所載）

落穂裳る鶏の親子や霜の畦　市浪

もや散りて鼻突きそうな軒の山

九代目の棟の漏りや秋の雨

風無うて二百十日は殘暑かな

文讀める灯のぢゞと鳴る夜長かな

蝶一つ女二人の郊野かな

過ぎし天長節を懐ふ

明治三十六年の天長節

は、吾に寂しき日なりき。

懇しき吾故郷を東北に去る數百里、北海道炭礦鐵道の石狩某驛を下りて石狩川を渡り、北すること二里にして一の寒村あり、此處より道は細く分れて尚北に辿ること殆ど一里なる山麓に、茂れる熊笹を僅に開きて一の人家あり、新築とはいひながら粗末なる板葺木造にして廣からず、某農場事務所との表札を掲げたり、吾は此處に住みぬ、然り、過ぎし雪なき十月初旬始めてこゝに來りしなり。

唯見る、タモ、イタヤ、カツラ等眼に餘りて林立せる喬木は風をはらみて絶えず颯々の音を立て、此間を所狭しと繁茂せし熊笹は數日前より降り積りし雪の重みに堪へやらで、今多くは地に這ひたれど、尚此の根、彼の山陰には僅に名殘をとゞめつ、あ

たりを見廻はせど、家としいへは吾住む他は四五丁を隔つる下なれば、棟さへ見えず、日々唯一の慰藉者とする名知らぬ鳥の聲さへも、今日はいかにやしけん耳欹つれども聞ゆずして、門前を流るゝ小川も半ば雪に隱くされて、せゝらぐ音のいとゞ細まれり、窓に椅りて眺むれど、周圍皆小山に包まれて、一も展望し得る所なく、日は木々の梢を漏りて照せど、わが郷里とは違ひ、それも薄き光のさながら今し山の端に沈み行く夕陽の如く、弱々しさ限りなし。

吾は今日も例に依りて色剝げたる小倉の、洋服といふもたゞ名のみなるを着け、外套を被り、鋸と鉞を肩にし日々己が課業とするストーブの薪を得むものと、唯ある立木の陰に行きて、恰も吾側にありし朽ちたる木株の雪を拂ひて腰を下し、暫しあたりの樣を眺めしが、不圖わが腦には或物を認めし心地。

わゝ自然！吾は叫びぬ、此木、此山、此水、そは皆自然の産物なる木、山、水にあらずや、吾視力の及ぶところ、そこに何等鋸の跡なく、そこに何等鑿の穿なし。これ

を以て内地の山川を案ずれば、そは自然の山川にあらずして、寧ろ人工なり。内地の松杉檜は總て俗人の播種する所、山水亦到る處俗人の足跡に蹂躙せられ擅に改築せらるるにあらずや、翻つて是を見るに、この幹、この枝の一と雖も撓められたるものなく、此の山、この川いづこと雖も加工せられたる個所を見出さず總て天惠のまゝなり。萬一ありとすれば、そは熊の蹄跡なり、然らずんばアイヌの所業なり。アイヌそは神代の人種にあらずや、太古の遺物にあらずや、これをしも吾は人工といふに忍びず。

あゝ自然なる哉、自然なる太古の面影なる哉。さりながらそれもやがては、吾等が手に歸せられて、漸次自然美の範圍を脱せひとす。喜ぶべきか、悲しむべきか。いつしかあらぬ思ひに迦りしが、來るとはなしにわか思ひは遠き畿内の空に馳せて、忘れかねたる故郷の戀しき垂乳根君の上ぞ偲ばれて、心は怪しらくもりしが、折しも目近に積りし雪を踏み來る穎々の跫足こと起りたれ。

何者ぞ、わが默想を妨ぐはと音する方に眼を放てば、先づ吾胸躍りぬ、そは友なき

吾に友として、日々幸報を齎し來る郵便配達夫なり、今日は如何なる雁の音づれぞと、やゝ鼓動は高ぶりつゝ、やがて吾が手に落ちしは、例に依りて三種の新聞紙の外に親しきわが友より送りし清麗なる「海」の繪葉書なりき。あゝ海！渴したるわが思ひを慰さめんとて吾友は贈り越せしならん、さても優しき友の心根かな、と心の内に感謝しつつ、何心なく、ペン先の走りも美はしき文字を讀み下せば、

君健在なりや、此葉書君の手に入る日は多分天長節ならんさらば君其地其日の情況を記して、わがアルバムを飾るに足るものを吾に送れ、われ亦當地の有樣を君に告げん。

あ、と吾は小さく聲立てぬ。實に不覺なりけり、さても吾はいつの日かく忘却する性となりしなん。

天長節！十一月三日！左なり、今日は紛れもなき十一月三日なり、天長節なり、若し友の音づれなかりしならば、吾は遂に思ひ出づることなくしてこの日を過しゝなるべし。あゝいかに恐れおほかるよ。いかに吾罪深かるよ。あゝ吾は今まで天長節を心付ざりしなり、暫たりとも、吾心は狂ひてありしか、亂れてありしか、はた死してありしか。吾は此耻づべき不敬の罪を心に深く恥ぢぬ。

吾はなほも心に誦し詫びつゝ家に歸りぬ。遲れ馳せながら、此佳節をいかに表祝せんかと考ふれば、先づ第一に要するものは日章旗……されど、あゝされど、それも、それも……あゝ罪いよゝ深うして、吾慚愧いよゝ胸に迫りぬ。かくて山中の孤家、求めんに寶る家なく、造らんに材料なし、あゝ今の今まで天長節としいへば、戸々幕を張り日章旗を出し、金モールの大禮服燦めしき軍人や、俥上盛裝の貴婦人や、勇躍する兒童等の往來するものとのみ思ひしを、今日唯今此友なき、人なき天地の、寂しき天長節を迎へし吾は、しみ〳〵都會の有かたさを感じたりき。

尙暫し思ひに耽りて、見顧りすれば今しストーブの火氣は絶ゑて、寒さ一入身に迫りぬ。

明治三十七年の天長節

は、吾に悲しき日なりき。

昨年といひ、今年といひ吾は奈何なる神の怒りに觸れしにや、府立病院第五號の一室の、中央に置かれたベッドの上に吾は痩せたる體軀を抱きて、仰臥しつゝ、此日も尙重き枕の辛き惱に呻吟せるなりき。

萬都の人士は今や暖き夢より醒めて、歡喜に滿ちし面持に、日本晴の空を眺めあひつゝ、過ぎし日より親しき友達と約束し置きし今日の物見、遊山の、いかに樂しきかを呟けるならん。或は、大君の御稜威と神の庇護に依り、連戰連勝の勢を以て進む我軍人の、いよ〳〵多幸なるを祈らんものと、をちこちの神社佛閣に杖を曳かんと思ひ、立つ人もあらん。さるを吾等悲しき一部の病者は、遂に何者の自由をも得ずして此日を暮さんとす、これも不孝生なる報とはいひながら、歎かはしき極みなり。懷へば過ぎし九月の末つかた、圖らずも吾は或る傳染病に襲はれぬ。時恰も日露の戰役將に酣な

る秋なりければ、吾が茅屋にも第八師團の勇士數名の宿泊せらるゝなりしが、わが病種良からざるため中途他に轉宿さるゝの止むなき氣の毒さを忍ばざるを得ざりき。經て十月一日吾は當病院の客となりて、此病室に送られてより、凡二週間にて全治するよしの醫師の言葉もたゞ一の氣休めに過ぎず、いつしかそれも泡と消え去りて、四週間目の終りは來りしも、いつかな吾病痾の怠るべうもあらず、天長節には退院し得べしや、との僅の頼みも、早や其日の目睫に迫りて、思ひいたづらに逸れぬ、これのみは如何せん術もなく、母の手厚き看護も其効なかりき。

さるほどに無情なる時は、容赦なく進みて、遂に佳節は來りぬ、吾が心如何に苦痛なりしよ、されど今はた女々しく何を求めんや、と靜かに觀念の眼を閉ぢて瞑想すれば、おりし去歳の寂しげや、今の悲しみや、萬感交々湧き來りて、疲れしわが胸は、あはれ麻の如く亂れ亂れぬ。

吾は姑し何を思へりしや、不圖けたゝましき笛の音の聞ゆるに、愕然として眼を

見開きつ、首を擡ぐれば、朝日は赤々と病室の硝子戸を透して、ペンキ塗りの板に映じつ、折から近くの玉江橋を渡る恐しき轍の響きは、微かに轆轤の音を吾が耳に送りて、わが胸はまたも、搔き亂されぬ。

あゝ、あの音の主は、フロックコートにシルクハット、髭美はしき紳士にあらずや。後に聞ゆるあの俥は、天晴交際場裡の花とうたはるゝ某令孃の、今日を晴れよと着飾れる姿にあらずや。續いて響くあの蹄の音は、定めて佩劍目映ゆき軍人にてありつらん。さすれば次は府の祝賀會に列すべき高等官か。あれ、さやけき少女の裝ひ。巡航船は今着きぬ、下る人、乘る人、下駄の音。

見たきものよ、とわれを忘れて半身を擡ぐれば、さても現か、幻か、自由なる吾身吾家にあらずして三方より犇々と迫る板壁、眼開けどそれかと思ひし日章旗の影さへあらず、折からに驗溫器持ちて廊下通る看護婦の白衣、キラ〳〵とわが眼に入れば、宛然夢より醒めし心地。む！病室なりけり！

かくて出るも入るも俱に窮屈なること、敢て囹圄に讓らざる吾が傳染病室中の天長節、そこに何等の變化なくして昨日に異ならず、恐らく明日も又斯くの如くなるべし。而して一の慰藉をも得ず、却つて苦痛を得。今にして思はへば、昨の天長節の寧ろ吾に、ある越味ありしを識りぬ。

あゝ壁一重その外は、此佳節を迎ふる歡喜の叫び、やがて大ならんとするに、僅に隔ちしこの内部は、忽ち變れる悲愁の巷。父母爰に愁ひ、兄弟爰に泣き、哀風悲雨屋内に滿つ、吾も其一人ながら、事態の變化の餘りに甚だしきに泣きたりき。

（明治三十九年十一月三日文庫所載）

幻の華に醉ひしれ嫁ぎてしわれにうつゝの夢醒めざれな　市浪

二なき魂二なき命のわれなれば二なき戀には寢れぬる哉

後ろ髮曳かるゝ心地おのが富の全きを思ふ師走の荒れ日

初醉

「げーぷつ、あゝ醉つた。」

一歩は高く、一歩は低く、所謂飄々浪々の千鳥足。帽子は耳に傾き、羽織はなかば肩を辷つて、危く紐のために支へられ、博多帶の下から、舊式の大形の時計がぶらりと拙い面を現してゐる。よくもすりにも惟らず――尤もすりに狙はれそうな立派な風裝ではないが、道がに生醉ひ本性たがはずとやら、無事に歸りついたものだと、つまらぬ所で感心もする氣になる。何うで途すがら二三度は、何處かの門松にぶつ付かつて、轉んだこともあるでせう、といはぬ計りに羽織紐の所に松葉が一本ひつかゝり、それを證明するためにとて、膝まへに土泥が二ところ圓くついてゐる。

戀とか愛とかいふ優しい問題――時には鬼婆も描くが――を扱ふ商賈の人としては、少々相應しからぬ廿貫餘もあらうといふ大兵肥滿の、セメント樽のなうな立派な

肉付きの男で。久しぶり無代酒を可厭といふ程呷つたので、前後も知らぬ大へゞレケ、何處を何うして歸つたのやら、友の門を出たのさへ一切御存じなしの無我夢中。こゝばかりは正月と遠ざかつた細い路次の門を潜つて、我家の格子を開けるや否やドッタリと、大きな體軀を小さい上り框に横たへたまゝ、忽ち鼾のやうな高鼾。

「グゥ〜。」

「お歸り……。」といはんとして、愕いたのは、ハイカラ髮の若い細君である。

「まあ、貴君、そんな所へ轉むぢやア、仕樣がないぢやありませんか、羽織だつて今度拵へた計りだのに……。」と當惑の眉をひそめたが、身動きだもさゝないで、相變らず鼾の聲のみ高い。

「まあ本當に仕樣がないねゑ！」チョッと輕く、細君愛嬌的の舌打をしたが、この儘に棄て置くべきにあらずと、近う寄り添ひ、

「貴君〜、そんな所に居ちや體が冷えますわ。」と暖い眼光を夫の顏に投げながら、

水仕の業に慣れない爲めか、暉の痕も痛々しい手で搖り始めたが、中々起きさうにもない。

「貴君！」と再び柄にない大きな聲で自烈つたさうに叫びだ時。

「う――むッ、」と寢返りをうつと同時に、ニューと、その太い腕を無意識に伸したものだから、

「あれ――、」といふまもあらず、可厭といふほど可愛い細君の、生命から二番目の頬を突きあげた。

「貴君、まあ、酷いことを……。」とふりかゝる後れ毛を搔きあげながら、半ば泣き聲になつて、恨めしさうに夫の顏を見戍ると、

太皷のやうな腹に、一つ大きな波動がうつて、口や鼻から酒臭い香がふーつと起つた。

續いて

「ゆ、免してくれ！」と腹の底から詫びる聲が漏れた。

漸く醉が醒めたかと、細君は愁眉を開き、

「氣が付きまして？貴君、何處で斯麼になるまで饗應れてゐらつしやつたの？ね！東さん？西さん？」

「村田……」と聲は突然大きくなつた、

「あらつ、喫驚するは！村田さん？聞かない名ねね？」

「ゆ、免してくれ！己が惡かつた！」と再び。

爰に於て細君は少なからず氣の毒に思つて、

「そんなに謝罪ないでも、もう痛くはありませんのよ。」と莞爾する。と、

「村田！己が惡かつた、今までの事は水に流してくれ！」

「まあ……。」と計りに細君は呆れたのである、今の言葉が自分のためでないとが知れると、氣の毒なと思つたのが、阿呆らしくなつて、獨り頬を赤うした。が、そうと

すれば夫は果して何麼罪を犯したのであらうと、細君は耳を欹てずには居られなかつた。

聲は起つた。

「ま、全く僕は知らなかつたのだ。君も餘り内氣ぢやないか。そ、そうと知つたら、ぼ、僕は彼女を娶りはしないのだ。僕は、け、決心した……。」と語尾は低く顫ひを帶びた。

「娶」といふ言葉を聞くと、細君はいひ知らぬ不安の涙の湧きくるを覺ゑて、胸は亂れ初めた。

「斷然僕は離縁する！ひ、村田、僕は君のために、最愛の女房を、り、離縁するのだ。き、君も、ぼ、僕の心を酌むでくれ、ね！君、そして俱に、そして俱に淋しい生涯を送らうぢやないか……。」

聞くと等しく細君は、夫の胸に俯伏して、遣瀬なき悲しさに、すゝり泣くのであつた。

× × × × × ×

其夜一よさ睡眠ことさへ出來なかつた細君は、翌朝夫に理由を詰つた。夫は其突然に愕いたが、事情の判明すると共に、彼は大なる哄笑を以て答へた。それは夫が近く開場せらる文士演劇に於ける出演者の一人で、其某場に用ゆべき科白の一節が、酔中端なくも細君のある言葉に依つて誘はれ、斯くも妻を愕かしたと判つた時、夫も妻も共に腹の縺れるまで笑ひ倒けた。そして妻は夫の成功疑ひなきことを、繰り返し、繰り返し稱へたそうな。

（明治四十年一月十五日文庫所載）

はだ寒う軒端いづれば朔風は袖ずりすぎぬうらぶれの人　市浪

かゝる日は涙に脆しともすればまたなき人の世とおもはれて

お伽噺し 棚の達摩

やんちやのちよか坊が家の臺所の、竈の上の棚に、大きなはりぼての達摩がありました。

何でもお祖父さんの時代からあるのださうで、臺所の見張り番として、此處に座禪を組むこと四十年、年に一度の煤拂にも、この達摩ばかりは退けたことがないといふお母さんのお話。ですから顔といへば山出しの印度人よろしくといふ有樣、冬の朝の白い雪達摩と違つて、これはまた煤達摩ともいふべきものなのです。

で、その姿には道のちよか坊も、隨分少さい時分には怖ゐて泣いた事もあつたさうですが、今はなか〳〵そんなやさしいのぢやありません、一つ違へば達摩の頭も擲りかねないほどの險幕です。

ある朝のことでした。寢坊のちよか坊は家の者が疾くに御飯をすまして、これから

夫れ〳〵お仕事にかゝらうとする時分に、漸く床を離れまして、ねむい眼をこすりこすり、お手水を使はうと臺所の棚の下までまゐりますと、突然頭の上から、

「坊つちやん、お早う……！」

と聲をかけたものがあります。

ちよか坊は愕いて見あげますと、それは啞だと思つた達摩で、白い齒を現はして、眞つ黑な顏してにやり〳〵と笑つてゐるのです。

何時にないことなので、ちよか坊は少なからず氣味惡くおぼえましたが、そこは持ち前の負じ魂を出して、

「何か用かい？」と意勢よく尋ねますと、

「イヤ、別に大した事ではないのですが、鳥渡申上げたい事がございまして……。」

「ぢや何か知らないが早く言いな！もう八時だから急いで學校へ行かなきや遲刻するから……。」

「ではざつとだけ申し上げます。」

と逢摩はあたりを見廻して、恰度誰も人の居らぬのを熟と見定め、聲を潜めまして、

「坊つちやんも御存じが知りませんが、下女の竹やは餘程悪い奴でございますよ、小用に立つて行た時などは、何時も膳棚で里芋の煮たのを一つ口へほり込んだり、お豆腐のお汁を鍋のまゝ吸ふてみたり、昨日の朝などは坊つちやんのお辨當に入れるお薩芋の大きなのを一つ口へほり込むだ處へ、お母さんが被來つて、坊は何處へ行つたとお尋ねになりましたから、お竹は口の中にほうばつたまゝ、苦しさうな聲を出して、お、お裏でございます、といつた處などは本當に面白うございした。それにあ奴はおたんちんの癖に大のお窶し好で、毎朝無駄なお湯を沸しちや、長いこと顔やら首筋やらを磨いた末、髪を撫でつけて、斑點に薄化粧をするまでが都合二時間、大體澤山のお給金を戴いて何をしに來たのか判りはしないのです、それに恐ろしく氣無性でお母さんが何か被仰つて、鳥渡でも氣に入らぬ事があると、直ぐ口抗へをしたり、内所で舌

を出したり、本當に私が見てゐても腹が立つほどで、若し私が自由の身でしたら疾くにあ奴の頭には瘤が出來てゐるのですが、悲しいことには私は手もなければ足もないので、何うすることも出來ずみす〳〵目の前に見ながら手を空うして居るのです今まではは大目に見て居りましたが、遂々辛抱がしされず坊つちやんまで申しあげますから、お母さんに被仰つてあんな奴は一日も早くお出しなさるがよろしうございます。」

と熱心面に現はれて申しましたので、ちよか坊も何とはなしに感動されまして、思はず、

「有がたう！よく言つてくれた、直ぐお母さんに言つてやるから、また頼むよ。」

と其儘走つて行てお母さんに告げましたので、お母さんも、

「おや〳〵さうかへ。」

と始めてお悟りになり、下女のお竹はその晩お暇になりました。

× × × × × ×

代つて口入屋から廂髪の下女のお松が來まして、十日餘り經つたころに、棚の達摩はまたちよか坊を呼び留めました。

「坊つちやん、今度のお松は何となくそわそわして居りませう、あれは全く男があるからで國元を出て來たのも、畢竟男の跡を追うて逃げて來たのです、それが證據にはお松の風姿を御覽なさいまし、私も及ばぬほどの眞つ黑けの顏を、毎朝〳〵洗ひ粉を一袋づゝ使つて磨くものですから、古いお寺の大黑柱のやうに黑光りになつて居りませう、髪といへば誓文拂の軒店のやうに、可厭にお廂が突き出て居ります、衣服は十二三の子が着るやうな茶糸交りの荒い縞でそれで歳が二十四といふのですから愕くぢやありませんか。それに坊つちやん、昨日の朝手紙が參りましたでせう、裏には大阪と書いてあつて、お松は伯父さんから來たのだと言つてゐましたが、眞つ赤な嘘ですよ、本當はこちらにゐる男からで、郵便の消印は七條としてあつたのを私は見たのです。坊つちやん、こんなもの駄目ですねゐお家のお爲にはちつとも成りはしませんよ

早くお母さんに被仰つて今のうちに出すやうになさいませ。」

と達磨は心底から告ましたので、お松はその晩お暇となりました。

× × × × ×

また代りのお梅が來まして、五日目でした、

「坊つちやん。」

と達摩は呼び留めました。よもや今日ではあるまいと思つてゐましたので、ちよか坊は愕きながら、

「やあ、大層早いねゐ。今度は。もう判つたかい？」

と見あげますと、達磨は相變らずにやりにやりと笑ひながら、

「今度は早うございましたでせう、實は坊つちやんを驚かさうと思つて、勢一杯研究しましたのです、處がこのお梅ばかりは全く落度の無い良い女子でございます。柔順で、温和うて、よく氣が附いて、始末がよくて、それはもう此寵を見れば直ぐに判り

ます、前のお松やお竹ですと、綺麗にお掃除をせんものですから、お釜の近所は、御飯のお汁の噴いたのや、豆のお汁や、みぶ菜の切れ端などが汚くこぼれて居りますけれど、今日の竈を御覽なさい、眞實に漆を塗つたやうに綺麗でせう、棚には塵すべ一本も無うて隅から隅まできちんと片付いてゐることは、見ても氣持がすつとしますはでせう、坊つちやん、こんな感心な女子は餘計ございませんよ、未だ日が淺いから慣には判りませんが、お母さんに被仰つて可成的目をかけて使ふやうになさいまし。」と大層褒めていひますと、ちよか坊は喜ぶことゝ思ひの外、至つて不機嫌な顏色で、

「ふむ、さうかへ！」

と落膽さうに言ひました、

といふのは何故かと言ひますと、いまお梅を良い女であるとすれば、もう去なす必要もなければ、新に雇ふことも出來ず、延いては是が達摩との話の言ひ納めになるからで、道に小さい胸にも、言ひ知らぬ淋しさをおぼゆるのでありました、

ちよか坊はいま悄然としてあちらへ行かうとしますと、達摩は再び呼び留めました

「坊つちやん何うなさつたのです？」

「むゝ。」

「まだ面白いお話がございますよ。」

これにまたちよか坊はいくらか勢を恢復しまして、

「まだあるのかい？ 面白い事が……。」

「はい〳〵、まだ〳〵ありますとも。實はねえ、坊つちやんにお尋ね申したいことがあるのです。お父さんは毎日何ちらへお越しでございます？」

「會社だよ。」

「あの、糸を製造へる會社でございますねえ？」

「むゝさうだ、紡績會社の重役だ。」

「お歸りは大抵何時頃でございます？」

「七時か八時頃だよ、朝の時もあるよ。」
「さうでございますか。あはゝゝゝ。」
と突然達磨は笑い出しました。
「達磨の爺い、何が可笑しいンだい。」
「ひゝゝゝゝ、いゑ別に何でございますがねゑ、坊つちやんはお父さんが毎日會社へお越しだとお思ひですか。」
「む、さう思つてるよ。」
「だから不可ないのでございます、お父さんは毎日祇園へお越です、そこにはねゑ、綺麗なお家があつてお父さんのおすきなお妾さんがあるのですよ、お父さんは毎日會社へ行くと見せかけて、その實會社へは鳥渡顔出しだけで、大抵はこゝに被居るのです、坊つちやんは御存じありますまい、動くことの出來ない私が何故知つてゐるかと申しますと、何時もお父さんのお使をして其處へ行く前のお竹の寐言から判つたので

す。然し坊つちやん、今のことは誰にも被仰つては不可ませんよ、坊つちやんのお心得までにそつと申しあげたのですから、若しお母さんにでも被仰らうものなら、吃度大變な喧嘩が起りますから、よろしいですか坊つちやん、必らず被仰ちや不可ませんよ。」
と達磨は念を入れて口留めいたしました。
其時は
「ふん、吃度言やせんよ。」
とちよか坊は確然答へましたが、何時か忘れて了つたと見ゑて、達磨から聞いた通りをお母さんに告げました、果してお母さんの顔には青筋が現はれましたが、それが納まると、
「坊や、よく言うてお呉れだつた。」
と、禮としてとして大好のカステラを二切れ頂いたものですから、ちよか坊は大喜

び、「矢つ張り言つた方がよかつたのだらう。」と内心はくよくよものを居りますと、案に相違、

その晩、達摩の言つたのが本當となつてお父さんとお母さんとは、掴み合ひこそなさいませんが、火花を散らした、大喧嘩となつて、お母さんがお泣きなさるやら、ちよか坊や、お梅に迄飛沫がかゝるやらで、「あゝ矢張り言はなかつた方がよかつたのだ。」と、とうゝゝ泣き出しましたが、それでも遂に小供です、何時かうとゝゝと眠つて了ひました。

× × × × × ×

翌る朝例の通り柵の下まで參りますと、達摩は尖つた聲で呼び留めました。

「坊つちやん、それ御覽なさい、私が昨日あれほど申しておきましたのに、お母さんに被仰いましたねね。何うです、大變な口論がありましたでせう、だから言はないことぢやないのです、何故坊つちやんは約束をお守りなさいませんでした、貴君は學校

で何をお習ひです、修身の本は何のためにお讀みになります、御存じですか、御存じなら言つて御覽なさい。」

と達摩はさも學校の先生のやうに尋ねましたが、ちよか坊はたゞ默つて俯向いて居りますので、

「何のために習つてゐるのか御存じないのですか。ふゝん、貴君も隨分馬鹿ですねね。」

と達摩は鼻の尖であしらひますと、癇癪もちのちよか坊、忽ちむつと腹を立てまして

「な、何が馬鹿だい、達摩の糞野郎ッ、己れの馬鹿を知らないで、人に馬鹿とぬかしやがる、も一べん言つてみい！酷度いめに遇してやる。」

「はゝゝゝ、馬鹿だと言つたのが、そんなに腹が立ちますか、立つならもつと御勉強なさい、貴君の試驗は何うです、何時も落第ばかりぢやありませんか、落第する者が阿呆か馬鹿でなかつたら、誰が馬鹿でせうあはゝゝ。」

「ふん、よく言つた、達摩の恩知らず奴！今に酷度い目を見せてやるから、覺ゑて居れ！。」

と、ちよか坊は眞赤な顔をして駈けて行きましたが、直ぐに大きな棕梠箒を持つて來ました。

達摩は眉をひめましたが、

「坊つちやん、それで何うなさるのです。」

「何うするも斯うするもあるかい。」

と言ひながら、ちよか坊は矢庭に箒を振りあげて、達摩の頭を可厭といふほど擲り付けました

身體の不自由な達摩は、避けることも出來ずに棚から、ころ〳〵と轉げ落ちましたが、途端にちよか坊の頭の天邊にぱかりとぶつ付かりました、

そこは幾何はりぼての達摩でも、大きな奴が棚の上から落つこつたのですから、ち

よか坊は

「わつ……。」

と聲をたてながら、頭を抱ゑて奥へ逃げ込みました。

「お母さん、だ達摩が坊の頭を叩いたよう……。」

「はゝゝゝ。」とお母さんはお笑ひなすつて、

「手のない達摩が何うして坊を叩いたのでせう。」

「でも頭が痛いよう、達摩の奴め、坊が叩いてやつたものだから、怒つて坊を叩き返しよつたのだ、お母さん見ておくれ、屹度達摩に違ひないのだから。」

「はゝゝ、ではお母さんが行つて、達摩を呵つてやりませう、さ被行い、」

と、連立つて臺所へ來て見ますと、可愛さうに達摩は庭の石燈の上に轉げながら、黑い涙を滴して泣いて居ります、側には箒が棄てゝあつて、見れば達摩の頭には瘤と違つて凹みが出來てゐるのです。お母さんは早くもそれとお察しになつて、達摩の頭

を撫でながら、

「坊！貴君も隨分悪戯ですねゑ、達摩さんが叩いたといふのも、畢竟貴君がぶつたはずみに、上から落ちて當つたのでせう、そうとすれば全く貴君が悪いのです、さ、達摩さんに謝罪なさい。」と破仰いますと、

ちよか坊がまだ何とも言はぬうちに、達摩は聲をかけました、

「坊つちやん、決して私にお謝罪なさることはございませんよ。奥さん、全く私が悪かつたのでございます、少さい坊つちやんだと侮つて、散々悪口を申しましたのが、私の落度でございます、自業自得ですから、私は覺悟いたして居ります、坊つちやん、改めて撲つなり叩くなりなすつて下さい、私は恨みも悲しみもいたしません。」

といと沈着いて申しますと、ちよか坊も大いに悟る處があつたと見ゑて、

「いゝゑ、達摩さん、お前ばかりぢやない、坊も悪かつたのだから、何卒赦しておくれよ。」

「滅相な、坊つちやんはお悪いのぢやありません、全く私が……。」

「いや坊も悪いのだ。」と、

果は相方言ひ合ひになりましたので、お母さんが「まあ〳〵」とお留めになり、

「それでは私が仲裁になつて仲直りをしますから、暫くお待ちなさい。」

と　お母さんは襷がけで、せんざいをお拵へになり、それが煑える間にと、金盥にお湯を取つて、久しく煤のため汚れてゐた身體を全然洗つておやりなさいましたので頭の凹みも復り、四十年振りに達摩は若かつた昔に歸つて、可い男振りとなりました。

そこでせんざい一杯づゝの仲直りが滞りなく目出度濟みますと、今度は居心地よくなつた元の棚に歸つて、以前のやうな無言の、深い深い座禪三昧に入りましたとさ。

（明治四十年十一月京都＝出新聞所載）

土砂流し

滿都の子女の懷中をして、その空なるに嘆かしめた誓文拂も、將に終局を告げやうといふ夜の十時頃であつた。

片側は寺の白壁、片側は孰れも固く戸を閉てた無職家造り、こゝばかりは雜踏の巷と遠ざかつた、點燈の灯影も薄暗い、唯ある淋しい裏通りを、孰れは誓文拂の歸りであらう、左に可なり大きな風呂敷包みを抱へながら、足早やに行き過ぐる二十二三の女がある。

可厭にハイカラつた大廂髪の上には、夜目にも驗るさ白リボンを刺して、十六七の娘女が着るやうな大柄の縞の袷に、派手なメリンスと紫繻子の眞夜帶を絞めてゐる。太つた體格の、脊の低い。幅の平たい大きな無細工な顏には、白粉が濃く塗つてあつて、一目令嬢でないことは明らかだ、何うせ紡績會社の工女か、墮落した看護婦か、

惡く言へば高等賣春婦、よく見た處で商家の女中が高々である。

女がいま五六間で四つ辻に出やうとする時、忽ち彼女の眼は地上にある小さき物の影を捕へた、それは反對の角にある辻店の饂飩屋の、微かな行燈に照し出された淺黄色の風呂敷包である。

彼女の胸は躍つた、「何……？」と急ぎ足に進むで拾はうとする、

此時早く彼時遲く、途端に彼方の蔭からぬッくり現はれたのは、三十二三の男であつたが、近くと、

「やあ！」と愕きの聲を放ちさま、突と拾ひあげた。

「了つた！」と思つた間に、もう遲かつた僅に一歩の相違で、掌中の玉？を失つた、女は茫然しながら歩み寄る。

跫音に始めて人あるを知つた男は、愕いて顏を上げると、女の顏をヂロリと一瞥したが、見られたからは仕方が無いといふ風

「恁麼ものを拾ひました」とその包を示しながら、何でせうね、若し金だつたら旨いですね」といつて、早やその結び目を解きにかゝる。

「そうで御座いますね」と女は力無さそうに言つて、凝つと見入りながら、「一足早かつたら私が拾ふのでした、私は半丁も向ふから眼に就いてゐましたので、走るやうにして來たのですけれど、遂々あなたに拾はれました。」と殘り惜しげにいふ。

「そうですか、貴女も御覽なすつたのですか。では仕方がありません、斯うしませう、金にしろ品物にしろ、半部分にしませうや、ね？内所で……」といふ内に包は解れた。

二人がおずゝゝ覗き寄ると、五六冊の書籍と倶に、こはそも如何に一圓紙幣の一束！紙にも包まず上には九十圓と書てある。

「あの九、九十圓も這入つてます！」と男が愕きの聲を放つと、女も、

「ね？九、九、九十圓ですつて……？！」

と言つたきり二人は姑し呆然とし金束を見詰めた。

と、忽ち側より聲あつて、

「はゝゝゝ、旨いことをしましたね。」

二人はきよつとして見返ると、眼に險のある三十七八の男が突つ立つてゐて、にやゝゝと笑つてゐるのだ。

「はゝゝ、可い相談が出來ますね、私も一つその中へ入れて貰へませんか。」

と聞くと先の男はむつと怒つて、

「貴君は何です？これは私とこの方とで見付けたのです、貴君に分配る理がありますか。」

「まあさういふものぢやありません、私も殆んど最初から見てゐたのです、請求する權利は充分あらうと思ふのです。」

「そんな事は私は知りません、兎に角二人で發見けたのですから、二人で分配るのが當然です。」

「はゝゝ、そうまで可厭なら強て分配よとはいひませんよ。さ、どれ交番へ行つて、是れ〳〵だと話しをして來よう！」と捨言葉を殘して行きかゝると、

慌てゝ先の男は呼び留めた。

「モ、モシ〳〵、鳥渡お待ちなさい、仕方がありません、分配ませう、什麽處へ行かれちや蚍蜉取らずだ。」

後の男は其處に立ち留つて、

「いや、御迷惑なら構ひません、私は正當の道を踏むのですから。」

「まあ〳〵可いぢやありませんか、そう硬氣にならなくても」と女に向ひ、「貴女もお氣の毒ですけれど、御覽の通りですからねえ、三つ分配にしませう。それでは卅圓宛ですか、斯處ぢや若しまた人が來ると不可ませんから横町の寂しい處へ行きませう！」

元の通りに風呂敷を包むで三人は連立つて歩き出したが、角の饂飩屋の前まで來ると、急に先の男は立留つて、

「私腹が減つて來ましたから、饂飩を一杯食はうと思ひます、お氣の毒ですけれど、鳥渡お待ち下さいませんか、直ぐ來ますから。然し此包を私が持つて行くと可笑しくお思ひでせうから。」と女に向ひ、

「貴女にお預けして置きませう。といつて困つたなあ、全體り渡しちや私の方が頼りないし。あ、かうしませう、失禮ですが貴女の持つて被居る風呂敷包をお預り出來ませんか、反物か何か這入つて居るのでせう？」

「あの……僅か十二三圓の代物しか這入つて居りません！」

「いや結構〳〵、何も貴女を疑ふのぢやありませんから、それで結構です。」と後の男に向ひ、

「では貴君も何か頂戴出來ませんか、この姉さんにも貰つたのですから……、何でも構ひません、直ぐお返ししますから……。」

「ぢやこれをあげて置きませう、十圓位は這入つて居るでせう。」と後の男は懐から鰐

皮の袋口を出して渡すと、

「や有がたう、それぢや慥にお預りしました、直ぐ參りますから、鳥渡此處でお待ち下さい。」と

先の男は暖簾を潜つて這入つて了つた。

姑くすると後の男も、

待つてゐても詰らぬ、私も一杯食つて來ます、貴女も何うです？ お先に失禮します。」と續いて這入つて了ふ。

女はなか〳〵儘飽處ぢやないのだ。胸はわく〳〵する。自分の手には今九十圓といふ大金を持つてゐるのだと思ふと、嬉しいやら、また一方には愚痴も出てくる。今一足早かつたら、自分は九十圓の丸取りが出來たのだ、それが鳥渡の違いから、人にせしめられて、漸く四十五圓づゝの話になつたと思ふと、また不意に邪魔者が現はれて三十圓に減らされた、減らされたのは詰らぬけれど、考へれば兎に角よい誓文拂の買

物をしたものだ、これさへあらば、今日大丸で買つたお召と帶との上に、まだあの羽織地も買ふるし、髪の道具から帶留や下駄なども可なり良いものが買ふる、都合に依つたら小さい指環の一つ位は購ふことが出來るかも知れぬと慾は慾を生みそれからそれへと芋環の糸繰るやうに聯想するうちに時は幾何經つたか判らぬが、

忽ち見ゆる角燈の光と、續いて起る靴の音に、女は瞬間の夢から醒めると「巡査！」といふ恐怖が、慾と換つて胸の中に湧いてきた、あゝあの巡査は自分が拾つた貨幣を持つてゐるといふことを知つて來たのではあるまいか、若し尋ねられたら、何う言譯すればよからう、自分は拾つた本人では無いけれど、屆け出ずに割前を貰はうとする罪の人には違い無いのだ。何うせう！ あゝ近寄つて來る、今更逃げるにも逃げられぬ、泣くにも泣かれぬ。

靴の音が留まると、巡査は角燈の光に、彼女の姿を照しながら、頭から足まで見上げ見下して、徐に口を開き、

「貴女は何うなさつたのです？」と至つて穏かな言ひ振り。

女はぱつと安心したが、頓に言葉は出なかつた、

「あの……、鳥渡待つてる方がありますので……！」

「あゝそうですか、それなら宜しいですが随分夜も更けてゐますからねえ。」といつて、隠袋からニッケル皮の時計を出して見て、

「もう殆んど十一時です、大抵の御用事ならお帰りなすつたが宜しいでせう！」

「はい有難うございます！」と女は已むなく聽へる。

「それぢやお氣をお附けなさい。」と

巡査はまた四邊を照し照し、横町へ曲つて了つた。

姿が消えると女はやつと胸を撫で下したが、待てども待てども、來ぬのは男の姿である、今巡査が言つた時間を考へると、殆ど三十分も待つてゐる、何うしたのであらう？と、女は尋ねて見る氣になつて、饂飩屋の暖簾に首を入れた。男の影は見えぬ。

框に腰をかけながら船を漕いでゐた小僧が、

「お出でやす！」と聲かけるのを、

「いゝえ」と女は打消して、「あの鳥渡お尋ねしますが、少し先に男の方が二人來ましたでせう。はい、別々に……。何うしたか御存じありませんか。」

「その方なら、先程北口の方から出られましたよ、」

「さうですか、」といつたが、

女は男の心を計りかねて怪しびだ。甚麽急用があつてか知らむが、大金を預けながら言葉もかけずに何處かへ行つて了ふとは何うしたのであらう。這入つた口を忘れて北口から出て、私の姿の見えぬのを、逃げたものとでも思つて、慌てゝ跡を追つかける心算で東の方へ行つたのではなからうかそれなれば却つて願ふても無い幸はひだ。自分は慥に金包を持つてゐる、矢つ張り神様は正直だ、最初に見附けたものを憐れむで下さつたのだらう。

それならば警察へは屆けず、默つて此儘持つて歸らう、と女は勝手な理屈を附けながら、饂飩屋の挨拶はそこ〳〵に、ぼくぼくもので北の方へと急いで行くのだ。

振り向きもせず足早に四五丁來た頃に、東側の唯ある格子戸をごろ〳〵と引き明けた。

「何方……？。」と内からの聲。

「あの私……由でございます。」

戸が明くと、女は轉ぶやうに驅け込むだ、

臺所には五十餘りの奥様が新聞を讀みながら火鉢に寄つてゐられる。女は遲刻を詫びる挨拶もせずに行きなり、

「奥様！警察へ屆けねば不可ませんでせうか、私、今九、九十圓拾ひましたのです！」

「ね？何だね？、」と奥様は問ひ返された餘りの突然に充分聞き取れなかつたのだ。

「あの、私、お金を拾ひましたのです、九十圓……」

「九十圓……？、」と奥様は鸚鵡返し、眼鏡越しに女の顔を凝つと見詰めて、「本當かね？。」

「何の嘘を申しますものか。」と顔を眞つ赤にして、彼の風呂敷包を前に置きながら。

「こ、これで御座いますわ！。」

「何れ！まあ汚い風呂敷だねね。」奥様は眉を顰めながら「本當なら、孰れ屆けねば不可ますまい、若し内所で隱したことが知れた時には罪になるからねね、まあ兎に角明けて見なさい！」

「明けないでも私慥かに見て來ましたのですけれど……。」と女は結び目を解きながら

「警察へ屆けずに貰つて置かうか知ら！」

「什麼慾をいふものぢやない、大したお金なら、落した人は甚麼に心配してゐるか知れないから……。」

言ひ言ひ包は解かれてゆく。奥様はまだ半信半疑、凝つと包を見詰めてゐられると

固いくゝりめが漸く開かれた。

現はれたのは、果して紙幣――？と思ひのほか、金――で、は、な、かつた。

先刻女が見たとは見もつかぬ新聞紙を札形に切つたものだ。

「わッ！違ふてゐる……！」と女は見る見る泣き聲になり潸々と涙を濡して「だ、ま、された。く、くやしい……！」とばかりそこに泣き倒れて了つた。

奥樣は呆れてものも言へなかつた。

× × × × × ×

其夜警察へ屆けることは屆けたが、それは拾つたといふ屆けではなく、取られたといふ屆であつた。

翌日女は家を出た、紡績の工女になつて、取られた品物の高を取り返すといふのださうな。

（明治四十年十一月京都日出新聞所載）

安心

「あゝ、よかつたこと――！私や迎も出られないか知らんと思つて、甚麼に心配したか判らせんわ！」

「私もだ――何んしろ頑固な親父だからね、何うかと氣を揉むだが、隙を見てやつと遁れて來た。」

と、堤の陰から低い寂しげな男女の聲が聞えてくると、間もなく屠所に曳かるゝ小羊のやうな緩い歩行の、その主の姿が朦朧と、暗黑の中から現出はれた。

軈て薄白くみゆる小徑の分れ際に來たとき、二人は突と立ち留つたが、半ば雜草に埋もれた直ぐ右手の、堤防に登る徑路を、前後になつて、脚下危く辿つて行くのだ。

よくは判らぬが、男は二十五六の痩姿、眉宇には憂愁の色が浮むでゐて、身には袷の重ね着に、白い兵子帶のぐる〳〵まき、足は素足に藺草履といふ如何にも取り亂し

た扮装。女は二十一二、常には愛嬌のあるらしい丸顔も、今は何となう暗愁をふびて身の回りも銀杏返しも倶にしぞけない有様然も白い足袋跣のまゝなのには、一見それと知らるゝ落人姿である。

改めて説くまでもないほどだか、彼等二人は世に先例少なからぬ運命に泣く者である。姑と嫁との性格の合ぬといふ處から夫婦といつても、たゞの五ヶ月、遂に御多分に漏れず、あはれ生木を裂かるゝに至つたものゝ、別離れた後も相慕ふた胸の血のあたゝかさに堪へかねて、人目を忍ひだ假衾互に隨意ならぬ浮世を咄ち合つた末が切迫詰つた多くの薄命の男女に演ぜらるゝ情死の一幕、涙の中に滯りなく相談は纏つて、今宵この河に可惜二十の若い身を投げやうといふ、いまはその悲哀しき首途の途中に外ならなかつたのである。

「いま頃は貴郎の宅でも私の宅でも、姿が見えないといつて、甚麽にか騒いで居りませうね！」と女の聲は顫つてゐる

「まだそれほどでは無からうが、何處へ行つた位思つて、嘸不思議がつてゐるだらう」

「私はもう屹度、宅の作やが提灯に灯をつけて、索しに出る用意をしてゐるだらうと思ひますわ！」と今更無邪氣らしいことをいふ。

「といふと、美さんは恰で追手を待つてゐるやうだねゑ？」と男の聲は苦しげである

「あ！」と女はその聲を制するやうに叫んだが、「貴郎そりや、餘りですわ、私や今になつて、什麽に水臭い心ぢやありませんわ、什麽女と思はれちや、私全く立つ瀬がないわ。」と潸々と泣き出した。

「おや、美さん、本當にしてゐるのかい。私は本氣でいつたのではないよ、お前が餘り無邪氣らしい言をいふもんだから……。」、

と男は當惑して宥めかゝる。

「いゝね、私ちつとでも貴郎に間違はれたとおもふと、く口惜しいわ。私や私や、けゝ決して什麽女ぢやありません、あ貴郎も大抵什麽こと位は御存じでせうに……。」と女

はいよ〳〵泣くのである。

「困つたねね！」と男は眉を顰めたが、「今のは全く私が悪かつたのだから赦しておくれ、ね、さ美さん、兎に角今は泣いてる場合ぢやないではないか、苦圖〳〵してゐて若し追手にでも捕まへられたら何うする、ますます恥を上塗るばかりだ。さ、もう泣きやむさ、泣きやんで、かねての事をちつとも早く、遂……行う……ぢやないか。」

と遂に語尾は顫つてゐた。

「ね、そ其れは私もうちやんと覺悟して居るのですわ、それを貴郎が今のやうな言を被仰るかる悲しいのよ。」と袖で涙を壓ゑる。

姓し二人は默して歩むだ。湖の茂みに啼いてゐた佗しげな蟋蟀も跫音にばつたり歇むで、淋しさ迫る秋の野に、女の啜り泣く音が微に傳はるのみだ。

二人は何時か堤防の上に登つた。

晝間は幅二丁に餘つて見ゆる大河も、今は唯僅に手元の一部分のみ眼に入るのだが

緩い流れの黒澄むだ水の面は、迚一つない穩かさ、宛然水も眠つてゐるのかと思はる。汀に立てる枯芦の茂みも、茫然と浮いて見ゑて、迚も下界のものとは思はれぬ。

かへりみる二人が家の影は、早や數丁の彼方に隔つて、隣り合せの窓を漏れて、同じやうな二つの灯影が、明瞭に四つの眼を射るのである、續いて村中の灯は或は離れ或は密接いて、各々微かな光を雨戸の際間からちらつかしてゐる。北の方の最後に大きいのは、菩提寺の住職が居間のランプでこの夜更けにもまだ何か書きものでもしてゐるのとみゑる。

二人は泣いた。——思へ、彼等の運命は、家が隣り合せのために、戀ふた、添ふた、別れた、泣いた、それのみか行き來さへせぬやうになつて、二人が死んだら、或は元の親睦にかへるかも知れぬ。

と、一陣の風が不意と西の方から起つて、冷やかに眠る水面を醒し、草叢を搖つて、彼等の裾を撫でると、二人は愕いたやうに吾に返つて、溺着の故かぶる〳〵と身震ひ

した。

仰ぐ、西南の空は何時しか雨雲に掩はれたのであらう、天高かつた秋の空の星影は消えて、見る間に鯨に飲まるゝ鰯の群のやうに、次第〳〵に星の光りは少なくなつてゆくのである。

「貴郎の宅には脚の悪いお父さんがお有りなさるし、私の宅には病人の母があるし、私等が死んだら甚麼に悲しみなさるでせう。」

と、遂に弱い女の心、また何か思ひ出した。

と聞く男の顔には、あゝまた愚痴か、それとも此期に及んでまだ命惜しみをするのか、と半ばさげすみ、半は哀むやうな色を現はして、

「今更什麼なことは言はないでも、最初から判り切つた話ぢやないか、親を棄て、身を棄てゝかゝつたものが、什麼氣の弱いことぢやあ、迚も死なれはせんよ。」と幾何か怒氣も交へたが、氣が付くと直ぐ聲を和らげて、「美さん、それは全く愚痴といふもの

だ、いま死ぬといふ人間が愚痴を列べてゐては、何時死ねることか判りはせん、その中には死ぬのが可厭になつて、乞食をしても、汚名を被ぶつても生きてゐたいやうになるものだ。ね、私等は什麼事はなからうが、

隨分考へ倦むだ擧句の果だから、もう何事も無い昔と諦めて、長い夢を見たのだと思つて、夢から醒める氣で、清い……清い世界に、ゆ……行かうぢやないか。」と手の甲で涙を擦すると、

「……」應答へずに女の啜り泣く音は、急にひゝと高うなつた。

と、途端に側らの芦の茂味がばさと鳴つて、風なきに葉はゆら〳〵と搖めいた。

「あ！」と男は敵に聲を立てたが、二人は一齊に、涙の眼をあげて音する方を見返つた。

刹那に、「追手よ。」といふ思は二人の胸を慄かして、心臓は聞えるばかり劇しき鼓動を傳へた。

忽ち、ぬつくりと黒い頭を擡げたのは、人――の――形――で、は、なかつた。多分野狐が呰を逆りに來たのであらう、が人の姿を見ると、先方の方が愕いて、直ちに踵を返して逃げて了つた。

「あゝよかつた……。」と口には言はねど、二人は胸を撫でおろしたのである。

× × × × ×

あゝ斯かる死の瞬間においてすらも、尙「安心」はあるのであらうか!!

古い想で拙劣い筆で自分は何を書いてのであらう、唯終りの一句を示したいに外ならぬ

（明治四十年十一月京都日出新聞所載）

亡き伯母のなさけかもはゞ
かの折に目白來てなけ秋草の家

市浪

客待車夫

熊「やあ！蜂公ぢやねえか」

蜂「おゝ、熊さんか」

熊「久しぶりだなあ！何うだ……、此頃は……」

蜂「薩張り不可ねえ、それに恁う年を取ると騙けるのも大儀にならあ」

熊「而うだらうとも、俺はお前よりちつとは若えが、それでも叶はねえ、偶にや廢めつ了ふかと思ふこともあるが、廢めて見ねえ明日からの口が乾上つて了ふからなあ。一たいお前は幾歳になるんだ？五十……七とは行くめい？」

蜂「はゝゝ、本當はもう一つ上だ」

熊「八かい、それにしちや若えなあ四五位としか見えねえ」

蜂「お役所にやそれでも一杯そこ〳〵に屆てゐるのだ、親父か怠惰で生れてから五六

年もはつて置きやがつたといふ話だ」

熊「はゝゝ、それぢやお役所ぢや生れるなり飛んだり跳ねたりといふ寸法だねえ？」

蜂「ふつふゝ、然し左うでなきや今頃迄梶棒が握れるものかな」

熊「ふむ、成程なあ」

蜂「……だが、何か他の仕事でも行つてゐて見ねえ、今頃は一主角の金持になつてゐて世を息子に譲つてからに俺は結構な御隠居さん、斯麼寒い雪でもちらつきそうな日などにや……」

熊「可いなあ、妾の二三も侍らして湯豆腐を肴に灘の暑い奴をちびり〳〵と引つ掛けながらか……」

蜂「はゝゝ、ぬつくりした炬燵へでも素込んでゐるつてのなら、俺等本當にいま死んでも心殘りはねえなあ」

熊「ふつふつふ、金持になつた故か大變氣が弱くなりくさつたな、俺なら未だ〳〵そ

の位では死なゝい、糖燐酸でもしつかり飲むで、話に聞く水戸黄門のやうに諸國漫遊と出かけるねえ、それから到る處で藝者の總擧げ、百圓札を湯次のやうに使ふて……」

蜂「おい〳〵鳥渡待ちな、百圓札つてお前實物を見た事があるのかい」

熊「勿論あるよ」

蜂「ふゝゝゝ、大方夢でだらう」

熊「はゝゝゝ、或は知れねえなあ、けれどもお前え、何うせ出來ねえ相談ならこの位の事は思はなくつて何うするかい、棒ほど願ふて針ほど叶ふといふぢやないか」

蜂「ひゝゝゝ、馬鹿〳〵しくて蛔目話にならん、麥の粥もよう啜らん餓鬼が」

熊「な、何だと、もう一遍言つて見な、其まゝに容赦はせんぞ」(聲色)

蜂「へつへつへゝ、成駒屋とは言はないぞ」

熊「お前にや言つて貰いたくねへ、これでも言ふ人があるんだからなあ」

蜂「糞でも喰ゑ「懐中は死にかゝつた目白でピィ〳〵つて啼いてゐやがら」

熊「へん、ぼん〳〵ながら象牙のやうな白い飯を食つてゐるんだで、お前のやうな粟の汁ばかりぢやねゐよ。」

蜂「はゝゝ、何とでも言つてろ口に税は掛らねゐからなあ。然し何うだい隨分暇ぢやねゐか、俺は近頃圓助と纏つた顏を見たことはねゐが、毎日〳〵十五や二十の端錢で蝦蟆のやうに白髮首を下げにやならんかと思ふと情けなくなつて來る。

熊「何うせ考へりや詰らん話しさ、斯麼寒い日にも汗水たらして漸く四五十の錢を持つて歸へりや、何うだい、嬶や餓鬼は饑じさうな面して待つてゐやがるし……。」

蜂「框を上るが上らん内に湯氣い起つやうな財布を引つ攫んぢやあ米屋と澤庵屋へ走りくさる。殘つた錢で濁酒のやうな酒の一合も買ふのは俺のものながら全く氣兼だ。」

熊「跡にはお前ゐ、痩せた目刺の十尾も買へるか買ゐねゐかだ。

蜂「物價はずん〳〵高くなるし、米だつて何うだい二十錢も出さなけりやあ買ゐねゐぢやねゐか、そうかといつて此方等は脚氣でもねゐのに麥飯も食へねゐからなあ。」

熊「それにゃ、電車は出來る、自轉車は走る、此頃ぢや自働車なんていふ厄介物が來やァがつたぢやねゐか、西洋の奴は碌なことを仕ねゐなあ。」

蜂「段々口は乾上つて行くし、俺等本當に首でも縊つて死ぬうか知ら！」

熊「おい〳〵馬鹿言いねゐ、什麼ことをして見ろい、嬶や子供が甚麼に困るか判らねいぢやねゐか、淨瑠璃の文句にもあらあ、後に殘りし妻や兒がつて……。」

蜂「それも然うだねゐ……がお前等は未だ若いから可いが、俺のやうに年を取つて見ねゐ、へイコラ〳〵言つて俥を引いてる、折にや染々死にたいと思ふこともあるよ。」

熊「はゝゝ、そうまで死にたけりや華嚴の瀧とかへ行くが可ゐ。」

蜂「何あに、遙々什麼處へ死にゝゆく錢があれば散財の一邊もして、好な奴と無理情死でもしてやるよ。」

熊「うふゝゝ、矢張り雀百まで躍り忘れぬ口だねゐ。」

蜂「それも皺くちや婆と情死しても追つ付かねゐが、若い女なら什麼奴とでも死ぬよ」

熊「本當によ、毎日脹れ面してゐる嬶の顔ぢや却つて張り倒してやりたくなる。といつて悄死しに女郎買に行くにも錢は無しか。」

蜂「……おゝ寒い、チョッ、暖さうな面してやがつても乘る奴は少ねゑものだなあ。」

熊「あ――あ、凝としてゝも詰らなゑ、徐々行からかい、歩いてりやまた腐つた煙草入の一つ位拾ふこともあら。あはゝゝ、

（二人右左に行かんとする）

客「おい俥夫ッ！」

兩人「へ、へ、へ、へ、……。」（一度に戻る）

客「七條までやつてくれ！」

兩人「へ、へ、へ、へ、さあ何うぞお乘りなすつて……。」

客「おい〳〵一人だよ、何方へ乘るんだ。」

兩人「へ……？」

熊「おい蜂公、俺が行くよ、さあ何うぞ。」

蜂「いや何うぞこちらへ、熊さん頼みだ、朝から一人も無ゑで困つてゐるのだから、俺に行かしてくれ！」

熊「おい馬鹿言ひねゑ、此處で客待をしてたのは俺の方が早いのだぜ、俺が行くのが當りまへだぜ、お前のやうな老耄は素つ込んで居な。」

蜂「什麼水臭い事をいふもんぢやない、俺に行かしてくれ、頼みだ、また可い日があつたらお前に讓るから。」

熊「知らないよ」

蜂「ぢや喧嘩なしにジャンケンをせう！其方が穏かだ

熊「ゑッ、糞煩さい奴だなあ、が、まア……仕方がねゑ、ほら……。」

兩人「ほら、ジャンケンホイ、ジャンケンホイ……。」

熊「そら見ねゑ、矢張り俺だ、天道様は正直だ。」

蜂「ゐゝいま〳〵しい。」

熊「はゝゝゝ。さあお乘りなすつて……。おや……客は居ないぢやねゑか、何處へ行たらう！」

蜂「はゝゝゝ、俺は知らない。」

熊「本當に何處へ行つたらうなあ……。」

蜂「はゝゝゝ、好い面の皮だ、矢張り天道樣は正直だ。」

熊「手前が苦圖〳〵ぬかすから折角の玉を逃したんだ。」

蜂「温和しく俺に讓つて置きや可いのに慾をするから何方も付かずだ。」

熊「生意氣な言をいふな梅干親爺奴、あゝ馬鹿〳〵しい。」

蜂「はゝゝゝゝ。」

熊「ハ、ハ——クション……。誰かゞ笑つてくさる。」

蜂「はゝゝゝ、ハ、ハ——クション、あゝ可笑しい。」

兩人「わッはつはゝゝゝゝ……。」

（二人仲直りをして行く）

（完）

明治四十年十二月京都日出新聞所載

市浪

松山のかげにかくるゝ一つ家に
茸の香のする十月の朝
うら淋し遠さより聞く轍音は
かすかになるをわが心追ふ
燐すれば暗さわがまに影さして
刹那に我れの痩せを見しかな

喜劇 エンゼル違ひ

甲「やあ！」

乙「やあ！」

甲「君か……？此處で逢はうとは思はなかつた、矢張り展覽會行かい。」

乙「君もかねゑ？ぢやあ一所に行かうぢやないか。」

「可からう！」

「君は未だ初めてかい。」

「いゝや、もう五六遍も行つた！。」

「五六遍！ぢや何か目的があるんだな！」

「目的？何がさ？」

「さう白ばくれなくても可からう。何うせ目的と言や極つてゐるさ、深くは言ふに及

ばぬ。北の端のぢやないか。」

「北の端？判らんねゑ、何をいゝのか。」

「はゝゝ、白々しい奴だなあ？それ、可いのがあるぢやないか、北の端によ。」

「可いの……？！む！あれかい、」

「そ――れ、知つてゐるんだらう。」

「あれなら知つてゐるよ、僕はまた外に意味があるんかと思つた、全くの處僕はあれを見たいから度々來るのだ。」

「はゝゝ、いよ〳〵白狀したね。何うだい、隨分美ぢやないか、」

「む、なか〳〵旨く出來てゐる、恰でエンゼルのやうだ。」

「何に！エンゼル以上だよ、御面相は勿論のこと、肩から腰から何とも言ひやうがないね。」

「全く惚々するよ。」

「緑の黒髪をお廂に結つてる具合から、例の鰹茶を着いてる處なんか振い付きたいほどの美人だ。」

「あゝまでの美人は到底凡人ぢや描かれんねゐ、餘程の手腕を持たなきやあ……。」

「而うさ、何うせ我々ぢやあれをモデルにしても駄目さ。」

「僕は敢て摸倣せうとは思はぬが、せめてあの位のを部室に飾りたいねゐ。」

「あはゝゝ、手生の花にしたいのは御同感だが到底我々貧書生にや覺束ないて。」

「高々十五圓や、二十圓の代物なら何うでも學資を紛かして取り寄せるが二百三百となると逡巡せざるを得ないねゐ。」

「はゝゝ、十五か二十で我有となるなら藝者を買より安いさ。」

「はゝゝ、藝者の代りにあれを買つて毎日眺めてるかねゐ。」

「藝者だつて身請するにや三百や五百は要るからねゐ、ましてあれは君、稀代の珍品ぢやないか、假令五百六百にしろ安いものさ。」

「餘り安くも無いねゐ、僕はまあ當分身請は止めた、それよりや毎日入場料を拂つて見に行くさ、會のある間は自分のものだと思つてりや事が濟むからなあ。」

「はゝゝ、それも可からう、先方から貴君は感心だとか何とか聲を掛けるまで行くが可からう。」

「はゝゝ、百年經つても聲は掛けねゐ！然し不思議に視線は逢ふのだがねゐ、僕が左へ行くと、向ふの瞳も左向くやうに見ゐる右へ行つても其通りだ、畢竟あれに一種の精神が宿つてゐるからだらう！」

「おい〳〵默つて聞いてりや可いかと思つて、無代で惚話ちや己が困るよ。」

「い〳〵や、何ものろけるんぢやないよ僕如何に何でもあんな死物に戀はせん、けれども何となく好きなのだ、あれを見るといひ知らぬ愉快を感ずるよ。」

「愈々事件だ、畢竟戀だねゐ、然も眞性の戀だよ。自分で戀だらうか戀ぢやないと意識する時分には既に心は戀に落ちてゐるのだ。」

「おい〳〵串談ぢやないせ、誰があんな物に戀する奴があるものか、考へても見たまへ、君だつて左うぢやないか。」

「否々左におらず、君は僕の心を識別する技倆はあるまい、僕は既により多く彼女を戀してゐる、底根惚れてゐるのだ、夫が證據には僕は何の意識なしに漂然こゝへ來ることが度々ある、確に十度はあつたねね。」

「おや〳〵愕かざるを得ん、世の中には隨分物好きもあるものだ。」

「僕敢て物好でもない、心底戀してゐるのだ、この上の希望は彼女と結婚したい……」

「あはゝ、呆れてものが言へない。」

「畢竟妻としてスヰートホームが造つて見たいのだ、彼女なら必ず平和な家庭が作れるよ、鳥渡見る處では温和さうだからねね。」

「うふつふ、無温和からうよ、温和し過ぎて困るだらうよ。」

「君の眼にも而う見えるかねえ、有難たい！愈々僕は決心した、僕が成業の曉には彼女を娶つて摸範的のホームを示して見やう！」

「うふゝゝ、眞面目くさつて、眼光が可笑い、氣でも狂やしないお知ら。」

「何に？失敬な、氣が狂つて何うするかい。」

「でも氣が違つてるとしか思へないぢやないか。」

「何故だい、異性を戀するに不思議があるかい。」

「ふつふゝゝ、まあ何うでも可いや。」

「何うでもよくはないよ、時に君はあれの親を知らないかねね？」

「ね？親？親とは誰だい？」

「親は親さ」

「ひ！作者の事かねね？」

「そ、そうだ。君もなか〳〵話せる、親即ち作者のことだ。」

「作者なら君、松島巖だらう。」

「何に？松島巖？松島と言や洋畫界の大家ぢやないか、そんな奴が娘を出すだらうか。」

「ね？娘？でも現に出てゐるぢやないか」

「而うだねね、全くだ、是れは不思議。然し君はよく知つてゐるねね、何處で聞いたのだ？」

「聞くも聞かぬもあるものか、ちやんと出てゐるぢやないか。」

「ど、何處にさ？」

「額縁の際によ、松島巖作、實價金六百圓と書いてある。」

「ね……？縁?! 一たい君は何を指して言つてるのだ？」

「何と言つて油畫の『女學生』ぢやないかい。」

「ね……?!」

「き、君は……？」

「ほ、僕かい……！看守女のことだ……！」

明治四十年十二月京都日出新聞所載

（完）

▲鮒

大脇市浪

朝疾く釣竿肩にして出ましゝ兄君の、いつになく遲くにこにこして歸り玉ふに、胸先づ躍り、如何に多くを得させ玉ひたりけんとソト尾籠を開けば、夥多詰め込まれたる雜草の底に小さなる鮒たゞ二尾！讀めたりな、默して書齋に行き玉ひしことの。

太郎の返辭

むかしある處に太郎といふ兒供がありました。ある日お母さんが、

「太郎、納家から薪を持つて來てお呉れ。」

と仰有いますと、

「はい、直ぐ致します。」と答へましたが、恰度その時遙に野良の方で、飼犬のエスが氣たゝましく吠ゑ出した聲を聞きますと、もう薪のことは忘れて了つて、直ぐ外へ走つて行きました。

大體太郎が「直ぐ致します。」と答へて置きながら、そのまゝ用事を濟ませないのは今日許りぢやありません、何時もその通りなので、始めの中こそやかましくお呵りになりましたが、此頃ではお母さんの方が魂負けをなさつて、餘り呵叱らないやうになりました、太郎はます〳〵それをよいことにして、お返辭だけは立派にしますが、用

ばなか〳〵達さないのです。

今太郎は薪のことは一切忘れて曠い野原でエスを友として戯れて居りましたが、不圖氣が附くとお腹が大層減つてゐるのみか空を見ると日は高う中天に掛つてゐて、既に晝も幾らか過ぎてゐるやうでしたので、急いで家へ歸りました、

歸つて見るともう晝御飯は濟んだ跡で、お父さんもお母さんも早や野良へ牛を曳いて行かれた後でした、で太郎は押入を索しましたが御飯ばかりでお菜が無いので、今度は袋棚から昨日買つて頂いた大きな菓子パンを取出すと、そのまゝまたもや野原へ走つて行きまして、大きな銀杏の際の木株に腰掛けながらパンを食べましたが、食べて了うと、今度は何うして遊ばうか、と大人のやうに眼を閉ぢながら考へて居りました。

と、程なくやかましい大勢の兒供の聲が太郎に近附いて來ましたので、太郎は愕いて首を上げますと、五六人の兒供が眞赤な顔をしながら、聲を張りあげて、

「鳥渡待て、鳥渡待て。」と言つてる者があるかと思ふと、
「直ぐに、直ぐに。」と叫んでゐる者や、
「暫く、暫く。」と唱へてゐる者、または
「聽て、聽て。」と言へる者のみならず、
これはまた一際聲高く、咽喉も張り裂くる許りに、
「唯今々々々々。」續けつんぼに叫んでゐるものもあるのです。
太郎は氣遣者の寄り合だなと思つて呆れながら、
「君等は何處の者だい、何で其麼にやかましく言つてるの？」と訊ねますと、
「僕等は自分の姓名を言つてるのです、君は僕等に名を言へと言つたぢやありませんか。」
「名？僕は其麼ことを言やせん。」と太郎が怪しみますと、
「嘘を言へ！」と大勢の兒供は異口同音に叫びましたが、

「知らぬといふなら、擲れ〳〵。」と其中の一人が後ろの方から叫びますと、
「待て〳〵、それより王樣の處へ連れて行かうぢやないか。」と他の者が言ひました。
「む、それがよからう。」と叫びながら、可厭がる太郎を寄つて集つて無理無體に、脊負つて居つた蜘蛛の巣のやうな細い糸で、手や足は勿論のこと、目も鼻もぐる〳〵と固ら捲き附けまして、大勢の中央に太郎を取り圍みますと、不思議や皆の足は土地を離れて空中を飛び行きました。
田や林や山や谷を越えて進むこと五六里、木は森々と茂り、岩石峨々と聳ゆる深山幽谷の間、そこに大きな洞穴がありまして、その前に足が留りますと、こはまた如何に前刻に勝る夥多の聲が囂しく響くのです。
「こ、此處は何處なのです？」と太郎は慌たゞしく訊ねますと、
「此處は君の家だから安心したまへ。皆も君の來るのを待つてゐたのだ。」と鳥渡待てがさも應接人のやうに答へました、

「な？」と太郎は半ば泣き聲になつて「此處は僕の家ぢやありませんよ。」

「何を言つてるのだ。」と大勢の兒供は一齊に叫びまして「此處は恰度君のやうな人間が住む處なんだから、澤山友達もあるし、ちつとも寂しくはないよ。」

と言ひながら、太郎の身體に捲き附けられた蜘蛛の糸を解いてやりますと、太郎はは、じめはつきり眼を見開いて四邊を見廻しましたが、何と悲慘な處でしたらう？

奥まつた洞穴の兩側には勢のない青い顏色の少年や少女が長う一列に並むでゐて、皆々口早に「只今々々。」「鳥渡待て〳〵。」「直きに〳〵。」などゝ、宛然學校で課業を學ぶやうに、各々の姓名を繰り返し繰り返し勢一杯に唱へてゐるのです。まだ〳〵その外には、「怠惰」「遲鈍」などゝいふ奇妙な名を持つてゐる兒供もあれば、また片隅の方にはモ一つ不氣嫌な顏をした憐れな兒供の一群があつて、名を「道草喰ひ」といふのでした。

「お〳〵、私は何うしたらよからう！」

と太郎は落膽しながら、「何卒僕を容して下さい。お、お母さんに逢ひたい……」

「何と言つても駄目だよ、」と鳥渡待ては悄なく言ひながら、「君はお母さんの言ふことを聞かないだらう、だから此處は君に適つてゐるのだ、名を延引國といふ……それ それ其處へ王樣が被來しやる。」

「な？何といふ國？」と、太郎は今まで遂ぞ聞いたことの無い名なので、聞き取れずに問ひ返しましたが、此時恰度重い跫音がドシリ〳〵と近附きますと、忽ち獅子の吼ゆるやうな聲で、

「太郎は來たかい、お前等は攫へて來たらうな？」

「はい、此處に來て居ります。」と鳥渡待ては直ぐ答へて、「そして太郎は私等が連れて參りますと少し前まで「直ぐに致します」と申して居りましたよ。」

太郎は恐る〳〵仰ぎ見ますと、體はピカピカと綠色に光り、兩脚は眞赤で、顏は黃色で、兩眼は宛然石炭のやうに黑々と光を放つてゐて、話に聞く赤鬼青鬼を一つに搗

き交せたやうな恐ろしい巨きな妖人なのです。

太郎は小さく身を縮めてゐますと、

「よし〳〵、其奴を俺に貸して見よ。」と言ひながら、妖怪は怖がる太郎を宛然雛人形のやうに手に取りあげて、くる〳〵と體中を見檢めるのです。太郎は今は生きた心地も無く、もう喰はれるか、もう呑まれるかとビク〳〵ものでゐますと、

「ゐ――と此奴は何とか言つたな、「暫く」でもなかつたし、これ〳〵少年、お母さんが何時も用事を言ひ付ける時にお前は何とか言ふね？「鳥渡待て」でもなし、「直ぐ」でもなし、「聽て」でもなかつたやうだ。兎に角何といふも同じ意味だから、何うせ此處へ來ねばならんのだが、お前の順番を定めねばならないから何とか言ふね？」

けれども太郎は首を垂れて默つて居りますので、怪人は槓杆のやうな強い指で太郎の口を刳開けましたので、澁々ながら、

「直ぐ致します。」と言ひました。

「ゐ！而うだ〳〵、よしそれならこの本を持てこちらへ來い。」と巨人は延引讀本といふ書籍を持たして、「直ぐに〳〵〳〵」と嚴しく繰返してゐる一列の端に立たしました。

此時太郎は疲れ切つて空腹を覺ゑましたが、始めて自分の惡かつた事を思ひ、若しお母さんの元へ歸ることが出來たら、今度こそは屹度素直にお母さんの仰を守つて用事を爲やうと、飜然悔悟いたしました。

姑くするとまた巨人が來まして、

「さ、お前は自分の役務をせねばならんが今日は初めてだから少しに負けてやる、「直ぐ致します」を千遍言ふのぢや、その代りに明日になつたら百萬遍言はねばならんぞ。」

「は、はい……」と太郎は不承無性に返辭をして引き下らうとしますと、前刻の蜘蛛の巣の糸が未だ足に纏い附いたゐたものと見ゑて、覺ゑずばつたりと床の上に倒れました。

途端に不圖眼が醒めると、自分は木株から綠の草の上に轉げてゐるのです。そして

彼方から、お母さんが

「太郎、早く歸つて夕御飯をお食りなさい。」と呼んで被居るのでした。

あゝ夢であつたか、と太郎は胸を擦で下しましたが、それからといふもの、お母さんの仰の度毎に、「直ぐ致します」とは言はずに「はい」と答へて仰を守る賢い兒供になりました。（英譯）

（をわり）

明治四十年十二月京都日出新聞所載

病室

自分が或る傳染病に罹つて某病院は第五號の一室に、痩せた體軀を抱きながら靜にうち臥してゐる時で、何でもうすら寒い風の吹きそめた十月下旬の夜の十時頃の事であつた。

自分は何かの機勢で宵寢から不圖眼が醒めると、何となく廊下がゴタ〳〵と騷しい、「はゝ、誰れかに變が來たのではあるまいか。」と直ぐ自分は胸を痛めながら耳を澄ましてゐると、左隣りの室で寢臺を直したり、蒲團を敷いたり、床を掃除したりするやうな音がする「ひ！明室に入院患者があるのだな。」と悟ると幾らか胸も收まつて來た。甚麼人で何病だらうなどゝ思つて見た。

軈て十分も經つたころ廊下の端の方に、バタ〳〵と五六人の跫音が起つて來て、それが近づくほどに咽喉をせい〳〵鳴らしてゐる患者を擔架か何かに載せて來たやうだ。

あ！ヂプテリヤ！と自分は直ぐに識つた。

時には自分の母も、附添のお墨さんも未だ起きてゐて硝子戸の際に居られたが、患者が隣りの室に運び込まれると、何時の間に聞いて來たのかお墨さんは早や母に隣りの事を話してゐる。

その話を聞くと患者といふのは七八歳の男の子で、五十近い父と四十五六の母と二十二三の姉とが附添つて來たこと、患者の容態は餘程の重體で迚も今夜が六つかしくて今に息を引き取るやら判らぬこと、で直ぐ切開手術をする筈になつてゐるが、夜が晩いので小兒科の醫長も外科の醫長も居らず、今宿直醫の中で執刀者に困つてゐることなどだ。母は道に他人事と思はず話の切れ目には嘆きの詞を放つて居られる。

聞いて自分は非常に氣を滅入らした、刻々快方に向ふ病人でさへも、枕元で重いとかむつかしいとか言はれるのは可い心持のせんものだ、まして海の者とも山の者とも知れぬ渾沌の境界目にゐる自分の苦痛は甚麼であつたらう、唯々觀念の眼を閉ぢて湧き

くる悲觀に打勝たうとしてゐると、

忽ち隣りの室から、けたゝましい女の聲が起つた。

「お母さん、お母さん、早く來て下さい、し靜ちやんが靜ちやんが……。」と狂氣のやうに叫ぶと、わつと泣く音が聞ゑるのだ。

正しくそれは今聞いた姉の聲で、察するに母なる人が用あつて看護婦の詰所へでも行つた間に患者に疑ふべき兆候が現れたのであらう！

聲を聞き付けてか、直ぐに廊下を走つて來る跫音が甚だしく響く。自分の附添のお墨さんも愕いて硝子戸を開けて飛んで行つた。

「何うですの？お惡いのですか。」

「は、はい、あの……。」と言つたが滿足に答へず姉は頓ひ聲で、「靜ちやん、靜ちやん！」と今度は呼び返さうと耳元で連呼してゐるらしい。

廊下の跫音が隣りの間へ這入つたと思ふと、直ぐ今は母の聲も交つて、

「靜雄！」

「靜ちやん！」と二人が悲しげな聲を絞つてやかましく叫び出した。

それにしても父は居るのか居らぬのか、咳拂ひ一つせんのは何うしたのであらう？

自分は不審に思つた。

「まあ貴女、さう被仰つても仕方がありませんからお靜になさいませ、却つて御病人に障りますから……。」といふのは看護婦のやうだ。

「貴女、醫師を呼んでくれませんか、何うも可疑しいやうすですから、早く……。」と言ふのは父の聲だ、矢張り父は居つたのだ、遂に男子い叫ぶべきを叫ばず姑く吾兒の成行を見てゐたが、形勢の非なるを識ると今は耐へかねたものと見ゆる。

「はい、もう直ぐに被來いませう、今も言つて參りましたのですから。」と言つたが看護婦も遂に見かねたのか、引き返して廊下をバタ〳〵と走つて行くと、ばつたり醫員に出逢つたらしい。

「あ！先生、早う行つてあげて下さいまし、もう餘つ程容態が變つて居ります。」

「ひゝ！」と一言答へたぎり醫師は別に急がうともせず上草履をバタリ〳〵と引き擦つて行くのだ。

自分は此時に限らず醫者といふものは隨分悠長なものだと思つた、自分の病氣中にても偖に四五度はある、苦しくて苦しくて耐らぬのに醫師はなか〳〵來ない、然し醫つて醫者の身になつて見れば無理はないかも知れぬ、容態をよく知つた病人から、熱がある苦しいからと言つて一々呼びにくるのに應じてゐては切があるまい、然しそれと今の場合とは少しく譯が違ふ。

醫師の跫音は漸く隣室に消えた、何うするだらうと耳を澄ましてゐると、切開するのではないらしい、カンフルの注射のやうだ、あゝ切開の用意は未だ出來ないのだらうかと、少なからず自分は齒痒ゆく思つた。

注射の間だけは遂に靜かである、露を含むだ六つの眼は醫師の手腕いかにと、危げ

な光を投げながら見戍つてゐることだらう。耳を欹てると、成程先刻までゼイ〳〵早かつた咽喉も今は姑くの時を置いて苦しげに鳴つてゐるのだ、あゝ臨終もいまの瞬間だらうかと思ふと、自分の病みぼうけた胸には堪ゑがたい痛さを覺ゑて、もうあの聲を聞くまいと兩手の人差指で耳の穴を固く壓ゑた、が、それは無駄であつた、可厭な想像はます〳〵募ると許りで、醫師の言葉も微かに指の隙間から傳はるのだ。

「何うもお氣毒ですが、もう仕方がありません、實は先刻御入院なさる時から今夜は保つまいかと話して居つたのです、然しもう一應切開を行つて見る積りですが、多分駄目かと思ひます、何しろ餘程手遲れになつてゐましたからね！」

と聞くと等しく母と姉は一際聲を放つて泣きだした、遂に父は幾らか收つた言ひ振り、

「何か他によい手段は無いものでせうか、何うかして取り留める……？」

「先づありませんね、切開と言つても恁ういふ有樣になれば九分九厘まで望みはありません、ですから身體に傷を附けるのが不可ないといふお考へならばこのまゝになさつたが可いでせう、それとも構はねば念のために行つて見ても可しいです。」

父は姑く思ひ惑ふてゐるやうであつたが、

「それでは兎に角切開とかを行つて頂きませう、若し取り返すやうなことになれば幸ひですし、不可ても仕方がありません、この兒もするだけのことをして貰へば、死んでも心殘りはありますまいから。」

「ぢや、而ういふことにしませう。」

醫師は何か小聲にいふと看護婦らしいのが走つて行つた。

もうゼイ〳〵いふのも聞ゑるか聞ゑねばほどになつた、あゝ可哀さうにと自分は太息した。

まもなく第二の上草履の音がパタリ〳〵と聞ゑて來た、定めて助手であらう。軈てそれが隣室に這入ると、忽ち看護婦の聲で、

「貴女方は外へお出で下さいませ、ね？　いゝね、惡いといふ譯ではございませんが、手術は御覽なさらない方が宜しいでせう、聲でもお起てなさいますと手術の邪魔にもなりますから……。」

と泣きじやくる二人を無理やりに連れ出したらしい、然し父だけは殘つてゐるやうだ。

再び部室は沈默した、手術に取り掛つたのであらう。廊下に立つてシク〳〵啜り泣く二人の外は微かの音さへ聞えぬ、これがまた自分には苦しく感じた。希くば彼の兒の上に幸あらしめよと望みながら、何とはなしに枕元の時計を開いて針の行衛を眤と見詰めた、一分二分！短いやうで永いものだ、早くこの一時の過げよかしと思ひながら、漸く十分！を指した時、何とは知らず見るに堪ねかねた自分は、パチリと蓋を合して了つた。

と同時に隣りの部室で何かガタリと物を置くやうな音がして、續いて醫者の聲、

「もう駄目です、御覽なさる通り全く呼吸が切れて居ります、何うもお氣毒ですが仕方がありません。」

と跡仕末を看護婦に命じて置いて醫師は自分の義務が濟むだと許り、パタリ〳〵と行つて了ふ。

轉ぶやうに室に這入つた二人は寢臺に取り附いて？わつと許りに泣き出した。軈て愚痴と涙は留途なく二人の眼から口からあふれるのだ。

「あゝ今年の春から漸う學校へ獨りで行くやうになつたと思つたから、半季も經たぬ間に何故靜ちやん、恁麼哀れな姿になつてお呉れだ、二人より無い寂しい兄弟だから姉さんは甚麼に靜ちやんの大きくなるのを樂しむで待つてゐたらう、其麼心も知らな。いで靜ちやんは何故幾間しい姿になつて了つたの、姉さんは思ふと、あゝ悲しい、悲しいわ！」

といつて泣くのは言ふまでも無く姉で、母は愛し子に別れた果が幾らか氣も取り亂

したのであらう、頻りに先の醫者の事を言つてゐる。

「風邪だ、風邪の重いのだといはれるものだから安心して他の先生にも見せずに信用して居つたら、遂々恁麼姿にして了つた、若し親類でなかつたら彼麼先生には見せはせんのだ、近所には最と可い先生も澤山あるのに、それを態々あんな遠方まで通つて、この兒が、て殺されたと思ふと、く、口惜しい、口惜しい……。」

といつか穩かならぬ言葉も漏れるので、遠に人の手前もあり、父は見かねて、

「これ！其麼馬鹿なことをいふものぢやない、可い加減に止めて跡仕末をせねば不可ないぢやないか、ね。私は家へ歸つて明日の用意をするから、お前と清とは今晩通夜をしてやれ、また朝になれば私が來るから。」

と泣き沈む二人を宥めて父は蒼皇と廊下を傳ふて出やうとする、忽ち中程で看護婦と爭論が起る、

「貴方、此處は傳染病室ですから、消毒なさらねば出られません。」

「何に？消毒！たつた今這入たばかりぢやありませんか、それで消毒せられて堪るものか、私はこのまゝ出ますから而う思つて下さい。」

と出る出さんで果は双方言ひあいになつたが、規則に背くことは出來ず、遂に男が我を折つたやうだ。

こちらはこちらで、一棟列ひだ七つの室から各々附添が出て來て、相身互ひ氣の毒だといつて茶碗に口水を持つて行くものもある、線香をあげるものもある、孰れ枕元の守刀は小刀位であつたらう、それやこれやで姑くはごつた返したが、不充分ながら一通りの用意が濟むと、早くも十二時近くなつてゐるので、附添連中はそれ〴〵部室に引き取つて寢て了ふ。

と、病院の夜は以前に勝つて一段と淋しく、また心細さが增す。隣りでは徐々念佛を稱ゑ初めて、或は高く或は低き南無妙法蓮華經の聲は一種いふべからざる悲哀の調を帶びて、自分の衰へた肺腑は宛然一枚づゝ剝がれるやうに感じた、耳を掩ふて只管

眠らうと試みたが、寢返りするもことも出來ずに、ます〳〵眼は冴ゑる許り、弱い病者が心中の懊惱は其人ならでは識ることが出來ぬ、それからそれへと忌むべき關想は次々に生じて、一時鳴り二時打ち、三時も四時も五時も濟むでしらん〳〵と室内が淸白むに及むで自分はほつと息を吐いた。

そして自分は念佛を聞き明した苦痛を思ふて、終日その罪の歸するところを怪しむだ。

（完）

明治四十年十二月十五日文庫所載

お伽話し

猿太夫と犬吉

一

むかしは仲の惡いことを譬へて「犬猿も啻ならず」と申しました。が、おひ〳〵世の開けるに連れて、今まで嫉視反目をして居りました犬と猿との間にも、何時しか仲直りが出來ましたと見えて、此頃では斯麼に仲のよいものもあるやうになりました。

茲に猿太夫といふ小猿は、犬吉といふ洋犬の脊中に跨がりながら、主の猿廻しに連れられて、毎日〳〵家々をめぐり、僅の錢を目的に覺束ない手踊を御覽に入れて、兒供等の喝采を拍して居りましたが、或日のこと猿太夫は猿廻しの氣附かぬやう、そつと犬吉の耳に口を當てゝ、

「ね、犬吉君、君は斯麼ことをして暮らしてゐるのが好きかね？」と問ひますと、犬吉は頭を振りながら、

犬「何の、僕がこれを好くものかい、可厭で可厭で堪らぬのだが、所事なしに動いてゐるのだ」

猿「君も而う思つてゐるのかい、僕も全く厭きて了つたから、折があつたら何うかして逃げて行きたいと思つてゐるのだが、僕獨りぢや迚も旨く逃げ終うせぬから、實は此間から苦心してゐたのだ、君も而う思つてるのなら恰度幸ひだから、何うだい、君一所に逃げやうぢやないか。」

犬「いや賛成々々、何時まで斯麼とをしてゐても詰らぬ、それぢや君、斯うせう僕の脊中に啖然摑まつてゐたまへ、僕が折を見て突つ走るから。」

猿「何うも氣の毒だなあ、實は僕斯うやつて毎日々々君の脊中に載つてゐるのは大變氣がねで堪らぬのだが、これも親方の命令で背く譯にいかぬから御免被つてゐるのだ。それに今逃げるといふのを君の脊中に載せて貰つては、本當に氣の毒だねえ。」と猿太夫は心の底から言ひますと、

犬「何あに君、其麼ことを遠慮して何うなるものか、別に君の獨り位は重くも何んともありはせん、さ、氣を附けて啖然摑つまてゐたまへ、折があつたら一生懸命に逃げ出すよ。」

猿「何うも濟まないねえ、それぢやお言葉に甘へるとせう、犬吉君何うか宜しく希ひますよ。」

斯麼相談のあらうとは露知らぬ猿廻しは

「こゝの家は錢を呉れるだらうか呉れぬだらうか」と心の中に推察しながら一軒々々這入つたり出たり、今恰度四つ辻に來まして、「何方へ行かうか」と考へてゐる隙を見計らつて、時分は宜しと猿太夫を載せた犬吉は、一目散！西の方へと駈け出しました。

「あつ……！」と猿廻しが愕いて眼を見張つた時には、二匹の姿はもう人込みの中に隱れて了つた跡でした。

二

人を駭かし、電柱に突き當り、俥に敷かれんとし、所謂倒けつ轉びつ跡をも見ずに猿太夫と犬吉は逃げて參りましたが、鎮守の森蔭に來着くと二匹はほつと息を吐いて先づ安心と猿は小株に腰を下し、犬吉は落葉を掻き集めて當座の蒲團となし、茲に改めて二匹は染々顔を見合はしました。

猿太夫は先づ感慨無量といふ有樣で、はろ〳〵と涙を溢しながら、

猿「犬吉君！何うも有難う、君の深い恩は僕決して忘れはせん、何時かこの御恩を報ずる折があるだらうと思ふ。全く命の親ともいふべきだ。」

犬「何あに、これんばかりの事を命の親の何うのと言はれては却つて僕の方が痛み入るよ、何うせ永い間の友達だから助け合ふのは相身互だ、まあさ、其麼に禮を言はなくても可いさ。然し猿太君、是れから君は何うする積りだね。」

猿「さあ、それだて、實は僕にも何う斯うといふ目的はないのだ、今更故山へ歸るといふ譯にも行かぬし、猿芝居の役者になるのは尙更可厭だし。」

犬「僕も實は目的がないのだ、何處へでも行つて雇つて呉れろといへば伺つて呉れぬ事もなからうが、わん〳〵吠えて盜人の番も餘り感心せぬ話だ、といつて君ぢやないが犬芝居も最一つ面白くないからねえ。」

猿「左うとも〳〵。」

犬「なあ猿太君、何が宜からう？」

猿「さあ……！」

二匹は頻りに考へて居りましたが、忽ち犬吉ははたと手を拍つて、

犬「判つた〳〵。」

猿「何んなことが……？。」

犬「といふはめの名案でも無いが、君も差詰め用事のない身體、僕も今の處では先づ自由になる身體だから、何うだい猿太君、君が賛成なら二匹一所に旅行をしやうぢやないか、最初は西の方へ向つて、大阪神戸それから姫路岡山廣島と追々順ぐりに見物

して行くのだ。」

猿「ひ！そいつは面白いな。」

犬「それとも外に好い處があるなら其處へ先に行つても可い。」

猿「ひ、それぢや斯うせう、僕は山奥に生れた悲しさに未だ海といふものを知らんのだ　それに永らく都會の塵に塗れて居つたので大に身體も疲れたやうに感じるから、兎に角須磨か舞子あたりへ行かう、そこで二三日保養してそれから先はまた其時の都合にせうぢやないか。」

犬「それもよからう、ぢや思ひ立つたが吉日といふから、明日とは言はず今から出立せう。それぢや君、また僕の脊中へ乘りたまへ、日のある中に一散走り、神戸あたりまで漕ぎ附けやう。」と、犬吉が勢込んで言ひますと、猿太夫はまた氣の毒さうに、

猿「何うも濟まんねえ、何時も君の脊中を煩はして。」

犬「はい〳〵また猿太君の氣の毒がり、何んの其麼遠慮が入るものか、苦圖々々言ふ

間に時が經つ。」

猿「それぢやまた御免被らう、重かつたら何時でも下りるから、やあどつこいしよ。」

猿太夫は犬吉の脊中に跨つて、樂しい想像を戯せながら、鎮守の森を出立いたしました。

三

唯ある停車場の門口へ差しかゝりますと

猿「おい犬吉君、鳥渡待ちたまへ。」と猿太夫は呼び留めました、

犬「む、何だい。」

猿「鳥渡下して呉れ玉へ、考へがあるのだ。」

犬「一體何うするんだい。」

猿「いやねえ、餘り君の脊中を借る許りでは氣の毒だし、それに未だ瀛車つてゐものには君も乘つたことがあるまいから、一つ聞いて見やうと思ふんだ。」

犬「錢が無くても乘せて呉れるだらうか。」

猿「さあそこだて、僕が一つ人並――いや猿並に猿智惠を絞つて願つて見やうと思ふんだ。」

犬「其麼ことは廢したまへ、到底駄目だよ。」

猿「まあ〳〵僕に任したまへつてよ。」

猿太夫は犬吉の脊中を下りると、人並にのこ〳〵と起つて歩いて行きましたが、改札口へ立ち留つて、二つ三つ頭を下げてお辭義をしながら、

猿「あのうお願があるのですが、御覽の通り吾々二匹は動物で切符を買ふ錢を持つて居りませんのですが、實はその須磨まで參りたいので、何とかして滊車に乘せて頂くことは出來ませんでせうか。」

驛夫は愕いて二匹の顏をじろ〳〵眺めながら、

夫「夫りや何うも無理な願ひだねえ、何ぼ君等のやうな動物だからといつて無代で乘

せる譯には行かぬ、犬には犬の賃錢があるからねえ、猿は餘り乘せたことは無いが。」

猿「さ、そこを何うかして願へませんでせうか、尤も甚麼汚い處でも排ひません、ねえ、貴方、何うぞ……。」と猿太夫は頻りに叩頭をするのでしたが、

夫「不可ん〳〵、何と言つても駄目だよ、結構な脚があるのぢやないか、歩いて行け歩いて行け！」

猿「まあ其麼に情なく言ふものぢやありません。」

猿太夫と驛夫とが押問答をしてゐる處へ、通りかゝつたのは驛長でしたが、この聲を耳にすると、

長「おい〳〵お前等は何を言つてるのだ。」

猿太夫はこれ屈强の手掛りと許り、忽ち彼方へ振り向きまして、

猿「實は私等は或る猿廻しに伺はれて居りました猿と犬で御座りますが、此度申し合せまして須磨の方へ旅行致さうと存じます、處が滊車といふ便利なものが出來てゐる

世の中に、てく〳〵歩いて行くのも餘り感心なことでもありませんので實は流車へ乘りたいと思つて居りますのです、が悲しい事には私等は動物だものですから一厘の錢も持つて居りません、で實は今もお願ひ申してゐる處で、何とかして甚麽汚い隅の方でも構ひませんからお慈悲に乘せて頂くことはなりませんでせうか。」

長「いやよく判つた、併し私もこゝの驛長とは言ひながら、如何にお前の言ふ事が道理でも、おいそれと無代乘せる譯にはいかぬが、幸ひお前等は猿廻しの猿だといふ話だから、此處で一つ踊つて見るがよからう、その禮として流車へは無代で乘せてやつたといふ事にする、ね、それが可いぢやないか。」

猿太夫はこれを聞いて飛立つ思ひ、

猿「何うも有難う御座います、私等に置きましても願ふても無い幸です、では早速此處で一つ御覽に入れませう。」と、氣の短い猿太夫は早や踊りかけます、

長「まあ待つてくれ」と、驛長は留めまして、

「此處ぢや餘り何だから、こちらの室へ來るが可からう。」

驛長の後に隨いて猿太夫と犬吉は言ふまでもなく、聞き傳へた見物人も大勢交つて參りまする、猿太夫は犬吉を見返つて、

猿「犬吉君、それぢや姑く待つてゐて呉れたまへ、濟めば直ぐに出て來るから、」

犬「僕も一所に行かう、君獨りに踊らしては僕も氣が濟まぬ、君の踊に連れて太鼓があれば囃して見たい場合だが、生憎太鼓は無しするから、一つ小狸君を眞似て腹鼓でも打ちたいと思つてゐるのだ。」

猿太は大に喜びで、

猿「そりや何うも結構だ、では犬吉君旨くやつて呉れたまへ。」

茲に驛長室へ這入りますと、大勢の見物人に圍まれながら、猿太夫は大車輪といふ有樣で、

猿「目出度〳〵の若松さまよ……。」と變な手振りで踊り出しますと、犬吉もそれに連

れて、屈曲の不自由な足で勢一杯の腹鼓をポテン〳〵と打つて囃しながら、

犬「枝もさかへて葉も茂る――。」と目出度く唱ひ終りますと、一度に起る笑ひ聲と、やいやといふ大喝采。驛長も腹を抱へて笑ひながら、

長「大變に面白かつた、それでは禮として須磨までの切符を二枚やるから。然し人間の客車へは乘る譯に行かぬ、荷物車の中で辛抱せねばならんよ。」

二匹は叩頭百拜

猿犬「有難うございます、有難うございます。」

と初めて滊車といふものに乘ることが出來まして大滿足。「藝は身を助くる」とはよく言つたものだと、道に舊主の恩を思ひ出して涙に暮れてゐる内に、早くも二時間半の時を經まして、

驛夫「須磨！須磨！」と呼ぶ驛夫の聲に愕いて、倉皇貨車を立ち出でました。

四

今日は須磨寺、明日は一の谷、鵯越と猿太夫と犬吉が、思ふ存分遊び廻つてゐる中にも、懐しく思つたのは曠々とした青海原ばかりでなく、宛然繪のやうに浮出された淡路島の面影でありました。

猿「ね、犬吉君、折角此處まで來た序には、せめてあの島とかいふ綺麗な處へ行つて見たいね」

犬「僕も同感だが、此奴は歩いて行く譯にもいかぬし困つたねゑ、また君の力でも借りて和船へでも旨く乘より仕方はあるまいて」

猿「さあその船もだ、斯う見渡す處では一向有りさうにも無し、何か外に可い工夫は無いものだらうか」

二匹は清い眞砂の上に轉びながら、とつおいつ思案に暮れて居りましたが、

犬「ぴ！有るぞ〳〵」と犬吉は突然叫びましたので、猿太夫も譯知らずに喜びながら、

猿「ぬ？有るかい、可い工夫が」

犬「有るとも有るとも。僕は今思ひ附いたのだがね、僕も生れは川の岸だから、ちつとは水泳ぎを心得てゐるのだが、恰度見渡す處あの島までは餘り遠くも無さそうだから、一つ君を乘せて泳いで行かうと思ふが、何うだらう」と勢込んで言ひますと、猿太は不安心らしく眼を光らせて、

猿「いかに君だつて、其麼旨いことが出來るだらうか、君獨りなら未だしもだが、僕といふものがあるからね」

犬「……では僕が君の前で、何れ位泳ぐかといふことを御覽に入れやう」といふが早いか、犬吉は矢庭に海中へづぼりと飛び込み足搖きを早めて行くほどに、忽ち姿は波の間に小さく消えて了ひましたが、間もなくぐるりと海中を輪なりに回つて、元の處に歸りますと、犬吉はぶる〳〵と水を拂い落して、

犬「何うだい、君、此位に泳ぐのだが何う思ふね」と幾らか鼻高々と申しますと、猿太も大に感心しまして、

猿「お手際は中々見事だ、人間の次に位する僕だが、これぱかりは少しも心得が無いので羞かしい。いや大に感心した、大船に乘つた氣で君の腕前に信賴するから何うか宜しく希ひたい」

犬「君に面う褒めて貰へば僕も餘程動き甲斐がある、却つて今少し未熟なのを羞入る次第だ、それぢや君、また僕の脊中へ來たまへ」

こゝで猿太夫はまた〳〵犬吉の脊中へ乘りますと、再び犬吉は足を早めて海中に浮び出しました。追々沖へ向ふほどに五丁十丁までは何の事もありませんでしたが、十五丁二十丁となつて來ますると、徐々犬吉の體が海中へ沒するやうになつて來ました

さあ猿太は怖くて〳〵堪りません、

猿「おい犬吉君、大丈夫かねね、何だか可笑しな具合ぢやないかへ？」

犬「いや心配し玉ふな、大丈夫だとも。」と犬吉はさも力强く申しましたが、その實餘程足は危くなつて來たのです。須磨の浦曲から眺めた處では高々十五丁か二十丁のや

うに見ねてゐたものが、行くも〳〵未だ前途は遠いのです、で、犬吉も倒頭はら〳〵と泪を溢しまして、

犬「なあ猿太君！」と今までの調子と打つて變つて悲しげに下から呼びかけました。

この聲を聞くと猿太はぱつとしまして、

猿「ど、何うしたといふのだ。犬吉君。」

犬「何とも君に對して言ひやうがないが、足がもう疲れて來た。僕が偉さうに言つた許りで罪のない君も俱に捲き添へを喰はすのかと思ふと僕の胸は破り裂けるやうだが、君、何うか斯麼馬鹿な奴に欺されたと思つて無い命と諦めて呉れ玉へ。」と涙ながらに申しますと、

猿「これ、犬吉君、其麼弱い言を言ひ玉ふな困るぢやないか、まあ一生懸命に働いて呉れたまへ、もう餘り遠くもなからうから。」

猿はもう氣が氣でないのです、が今更仕方はありません、死なば諸共と唯々犬吉の

脊中に喰い附いて居りますると、犬吉の足は段々動かなくなりまして、二匹の體も水中に沈み勝となつて來ました。

猿「助けて呉れッ。」と猿が思はず叫びますと、犬も氣が附いたやうに、

犬「助けて呉れッ――。」と覺束なくも聲を限りに叫び立てましたが、近くには一艘の小船とても見ねません。

犬猿「ワン〳〵、キャッキャ。」と泣き悶ねるうちに、見る〳〵二匹の影は深い海底に沈ひで了いました。

五

水中に影を沒した猿太夫と犬吉は、果して海の藻屑となつたのでせうか、茲にこの二匹を死なしてはこの物語も終を告げるのですが、天は未だ〳〵彼等二匹を見切りませんでした。

茲に淡路國は明石海峽に面した海岸の一漁村に五六人の兒供がありましたが、昨夜

の大風雨とは別世界のやうな今日の好天氣に、海岸に打ち上げられた樣々の得物を拾はんと、打連れ立つて來て見ますと、得物もこれはまた愕く許りに、大きな洋犬の脊中に嚙り着きながら、俱に息も絶へて居る猿の死骸がありました。道の兒供等も餘りの意外さに呆るゝ許り、姑し見詰めて居りましたが、中に腕白なのが獨り、突と進み寄ると、足をあげて蹶ゝ飛すのです、是れに力を得た怖がり連も、俱々に彼方へ蹶り此方へ蹶り、蹶つて居りますと、何うした機會か不思議にも、

猿「う――む。」と猿の方が呻吟り出しますと、續いて犬の方も、

犬「う――む。」と呻吟き出しました。

さあ愕いたのは兒供等で、これは堪らぬと八方へ逃て行きましたが、遠くから怖々眺めて居りますと、今度は犬も猿も言ひ合したやう一時に、ガブリ〳〵と多量の水を吐き出しました、それが濟むと今まで動かなかつた腹部に、波のやうな動きが見ゑて來て、隨つて呻吟き聲も段々と高くなつて來ました。恰度此時兒供の注進に依つて驅

け付けて來ましたのは、老年株の二三人で、此有樣を見ると、直ぐに火を焚き、用意の氣付藥等を飲ませながら、人間のやうに介抱してやりましたので、漸う猿と犬とは眼を開いて、道ふことの出來るやうになりました。これは態々茲に說明するまでもありません猿太夫と犬吉でありました。

將に消へんとする命を、兒供の惡戲から端なくも此世の物となつた猿太夫と犬吉は、群がる人々に向ふて頻りに感謝の言辭を陳べました、

猿「然し此處は何といふ處で御座います。」

と猿太夫は訊ねました。人々もその甲斐あつたのを喜びまして、

人「此處は淡路といふ國だよ。」

猿犬「ゑ？ あの淡路？」と二匹は聞くと等しく、その意外なるに愕き且つ喜びました。

それもその筈です、猿犬等の助つたのでさへも奇妙であると思つてゐる矢先へ、然も此處が豫て望むで居つた淡路島だと聞いたのですから、愕くのは無理もありません

で二匹は爰に今までの一伍一什を具に語りましたので、人々もその奇なるに愕き且つ大に同情を表しまして、

甲「それぢや姑く此村に滯在して、村の用事を手傳い、その暇には好む處を見物するがよからう」と甲が發言しますと、

乙「では猿太夫君は俺の方に引き受けやう」

丙「では犬吉君を俺の方が引き取らう」と

といよ〳〵話が極まりますと、二匹は勇みに勇むで、多くの人に取り圍まれながら、家路を指して急ぎました。

六

猿太夫と犬吉は、それから恰度一ヶ月をこの村で過しましたが、或日のこと、

猿「ね、犬吉君、隨分永う此處に居つたが、君は何う思ふ、最つと此處に居たいかねえ」

犬「さあ、實は僕も考へぬ事は無いのだ、來て見れば餘り此處も可い處ではないね」

猿「さう〳〵、對岸から見てゐる時には餘程可い處のやうに思つたものだから、あんな辛い目まで見て來たが、何でも此通りだ、見ると聞くとは大きな相違だねえ」

犬「然し何も經驗だ、見んより增だと思つてりや氣も濟むが、さて濟まんのは此村の兒供だて、お前の命の親だといはぬ許りに、散々追使ひやがるのが癪に障る」

猿「本當にさうだ、僕だつて何うかしてやらうと思ふ時もあるが、まあ〳〵と堪ねてゐるのだ」

「此間なんか、大きな奴が僕を馬乘りにしやがつて、手綱の代りに耳を持つて、はいはいなんてぬかすのだ、大に癪に障つたから、動かずに凝としてゐると、さあ怒りよつてなあ、竹を取つて來やがつて尻りピシャ〳〵叩きくさるのだ、猿太君、むかつくぢやないか、だから僕思ひ切つて疾走つてやつたら、すつてんころりと落ちよつてなあ、彼處に氣味の可いことはなかつた」

猿「はゝゝ、そいつは可かつたねえ、僕だつてさうよ、暇な時にやヤレ轉々舞ひをせよの何のと強いられるし、一番困るのは屋根裏の雀の子を取れとせがまれる時だ、僕如何に竹昇りが上手でも、これ許りは閉口だ一つ踏外して見たまへ……猿も木から落つる譬もあるんだからねえ」

犬「君は餘程樂なんだよ、僕は毎日〳〵一里からもある隣り村へ豆腐を買いに行かにやならないし。兎に角何方にしても僕は可厭だ。といつて困つたなあ、逃げるにも先度のやうなことは君も懲々だらうて。」

猿「はゝゝ、もうあいつは御免被る、が逃げるなら逃げるで、ちやんと僕に好い工夫があるのだ、それ僕の方の横手に古い雨戸が二枚置いてあるだらう、あれを畳間人の知らぬ間にそつと濱邊へ持ち出して置くのだ小舟もあるけれど、其麼のを持ち出すのは餘り盗人染てるからね、そして君、木切れで櫂の代りに使つて行きや、今度は僕さへ働けば彼岸さで位行けぬ事もあるまい。」

犬「ぢやさういふことにせう、今幸ひ人も居らぬやうだから持ち出して置かうや。」

斯くて猿太夫と犬吉は逃亡の準備をして居りましたが、この日夕方から吹きだした西風は意外に烈しくなつて、姑し海上は怒濤狂瀾といふ有樣でしたが、夜半近ななつて、少しは凪いだを幸に、これ屈強の時と許り二匹は雨戸を二枚重ねた舟に乘り、猿太は木切れの櫂を執つて浪路遙に、もちと大層ですが、えんさ〳〵と漕ぎ出しました。

七

凪いだとはいひながら、何しろ未だ殘る浪風の烈しい中へ、奇妙な雨戸を舟として浮べ、然も漕手は猿といふのですから、却々自由に進みさうな筈はありません、僅に對岸遠く仄見ゆる灯を目當として、猿は顔をいよ〳〵眞赤にしながら、漕ぐほどに行くほどに、千里の路も一歩より始まるで、漸て十丁近くも參りましたでせう。

「助けてくれ――つ。」と叫ぶ人の聲が微に二匹の耳に這入りました。

猿「おい犬吉君、誰れか助けて呉れと言つてるよ。」

犬「ひん、さうらしいな。」

二匹は眼を見張りましたが、夜は益々暗く、猿太も犬吉も全身ビッショリ潮に濡れて、板舟は始終水を潜り浮かりすると、浪に誘はれさうなのです。

猿「何うせう犬吉君、助けてやらうか。」

犬「ささうさなあ、人獨り乘せても舟は大丈夫かい。」

猿「獨り位は搆はないよ、二人ぢや困るがなあ。」

犬「一人なら助けてやらうや、助けてさへ置けば善いことはあつても惡くはなからう。」

猿「よし來た、それぢや聲を頼りに漕いで行かう。」

二匹が腕に撚をかけた時に、また

人「助けてくれ——っ。」と叫ぶ聲は少しく近くなつて居りました。

猿犬「ふ——い、助けるぞ——。」と犬吉も手傳つて漕ぎながら、二匹が叫びますと、そ

の聲が先方に通じたと見えて、直ぐに

人「ふ——い、助けてくれ。」と響いて來ました。

茲に於て、「旨い」と許り犬吉と猿太とが變る〳〵「ふ——い」と呼べば、「ふ——い」と彼方も答へする中に、いよ〳〵聲は近づきましたが、忽ちガタリと板舟と衝突しましたのは長い櫂でありました。

猿犬「それッ！」と二匹が蹌踉きながら引きあげましたのは船頭風の男でしたが、それと俱に先づ安心と氣が緩むだ故か、男はぐつたり板舟の上に斃れて了ひました。

八

萬難を冒してこの板舟が須磨と舞子との中央程に漂着しましたは、しら〳〵と世の白み初めた頃でした。猿太夫と犬吉は直ぐに人を扶けあげて、代る〳〵俺が身體の暖味を男の胸に當てゝ介抱してゐる中に、男は漸く我に返つてはつきり眼を開きましたが愕然としました。といふのは無理もありません、援つて呉れたのは人間とばかり思

つてゐたものが、意外にも猿と犬であつたからです。二匹が甲斐があつたと喜ぶに引き換へ男は禮をいふのも忘れて、染々二匹の顔を見詰めて居りましたが、

男「若しやお前は猿太夫では無いか。」と突然の問に猿太夫が、

猿「へつ……？」愕くのを尻目にかけて、

男「お前は矢張り犬吉だなあ。」

犬「へつ……？」と犬吉も愕いて、二匹が俱に尻込みするを、男は

男「まあ〳〵。」と宥めて、「その愕きは道理ながら、今更私はお前等を何うするとは言ひはせんから、私の話を聞いてお呉れ、私もお前等に去られて未だ一ヶ月餘りより經ちはせんが、この間に何れ程俺は苦勞をしたらう、急に儲けの道を失ふて十日餘りは路頭に迷ふたが、委しいことはいま言ふ必要もないから止める、それから何かと道を求めたが、何れも是れも良いのは見當らぬ、最後にやつたのが、俺の姿を見ても判る船頭だ、船頭と言つても五百石千石と積むそんな大きなのぢやない、漸う二十石か

三十石も積めるか積めんの小さい奴だ、それを或人に信用せられて、一艘借つて出たのが今度の初航海だ、處が昨夕のやうな大暴風だらう、忽ち船は轉覆する、他の奴等とは別れ〳〵になつて、僅に一本の櫂を捕へて浪間に漂ふてゐたが、運よくも助けて貰つたのがお前の船、全く其時までは人とばかり思つてゐたが、今見て始めて愕いた、自分を見限つて逃げ去つたお前等に助けて貰はうとは俺は夢にも思はんことだ、是れも矢張りお前等とは切れぬ縁だらうが、然し元の通りになつて呉れろとは言はん、俺は岩に嚙り附てゞも食ふだけは食つて行くから、お前等も一度是れと思つた上は、心を確に持つて思つた道を歩くがよい。それではもう別れるぞ、命を助けて呉れた恩は決して忘れはせんよ。」と男は言ふだけのことを言つて早や行かんとするを、泣きながら

猿犬「親方さん、何うぞ待つて下さいと二匹は追ひ縋りまして、「何とも申譯が御座いません、貴方がそれほど苦勞をなさらうとは考へずに無鐵砲に出ましたのは全く私等が悪う御座いました、實は私等も其後隨分苦勞をしまして、既に一度は死んで居つたの

です、それを計らず助けられて姑く淡路島の方に居りましたが、厭つぽい私等の性質として間もなくそこが可厭になり、昨夕の暴風を幸ひに逃れて出ましたのですが、途中で貴方をお助けしようとは、私等も全く意外でした、是も矢張り永い間厚い御恩を受けました萬分の御恩報じで御座いませう、就きましては今までの罪は萬々御詫び申しますから、何うか元の通りに使ふて頂くことは出來ませんでせうか、全くこれから先は何うせうといふ目的もないので迷ふてゐる處で御座りますから、お聞き下さいますなら乾度以前に勝つて働くやうに致します」

と二匹は涙を流して頼みましたので、一旦斯うと決心した男も

男「それほどお前等も頼むし、俺も何れといつて目的のない矢先だから、再び元の猿廻しに返つて踊つて世を送るとせう」と

茲に相方の胸が解け合ひますと、

猿犬「それでは早速今からお供致しませう」

と猿太夫はまた犬吉の脊中に跨つて歩き出しました。

× × × × × ×

斯くてこの猿廻しの一行は元の都に歸つて、今年のお正月もまた舊年に變らず、市中を廻つて居るさうです、目出度し〳〵

（明治四十一年京都日出新聞所載）

▲火鉢の灰

市朗

實に小説もなし、見るものもなし、する用もなし、所在なさに或日或處の或宿屋の二階の一室で、火のない火鉢の灰を何氣なく掻き廻してゐると、不圖固いものが火箸の尖に當つた何だらう石か、と思つてそれを挾むてあげて見ると、火に燒けて黑く變色した丸い錢の形が出て來た、オヤ五厘だらうか知らんと、よく見ると大きく眞中に五と書いてある五錢の白……否黑銅ぢやないか、ヤー兎に角言い儲けをしたと思ふと慾が附いて來て、若し是が……十圓の金貨であつたら何うであらう、あの本も買へる、此時計も買へる、何もかへる、かもかへる、と持切れない程澤山買つたなア……と恰で金貨を拾つたやうな心地になつて、オヤと氣がつくと、握つでゐるのは五錢の黑銅、茫ッとしたが、これでもまあ拾はないよりましだと思つて、灰で磨いて見たが中々光りそうもない、兎に角其儘懷中の寶と化したが、それからと言ふ者は何處の宿屋へ行つても、火があつてもなくつても火鉢の灰を掻き廻す氣になつた。と言つてもそんなに度々出やしない。

脚本

一夜の嵐

元徳年間の事

登場人名

齋藤太郎左衛門利行　五十二三歳

左近藏人頼春　三十歳前後

同人妻竹崎（齋藤利行娘）　二十二三歳

本舞臺八疊の一間、上手に樣側ありて、松杉、燈籠其他庭前の配置よろしく、座敷には床、生花、掛軸、机、火鉢、燭臺等それぞれ配備、總て北條方六波羅の侍大將齋藤太郎左衛門利行が奥書齋の夜景。

こゝに白髪交りの齋藤太郎左衛門利行机に片肘突きながら、默然として沈思の體、側には北面の武士左近藏人頼春の妻竹崎兩眼に涙をうかべ深く頭を垂れて愛ひの面持

靜寂の中に幕明けば、左近藏人頼春花道より小走りに出來り、よき處に立ち留り、獨り言、

左「ハテ、心にかゝるは妻の振舞ひ、われ今宵過つて一大事をうち明かせしが、開けば里方へ急ぎ行きしとのこと、さつては父の許に赴き、大事を密告ぐる心底と職られたり、憎つくき女郎！イデ一擊に打ち捕りくれん、さうぢや、暫時も早う、と小刀の柄を握り、再び小走りに行き、庭前の木蔭を傳ふて裏手の小門を押すに音なく開く、藏人莞爾笑みながら忍び入り、二人の影を見て苦痛の動作、軈て座敷の後ろに隱る、

とは知らず、こなたの太郎左衛門、俄に氣色を變じ、側に置きある大小を取るより早く立ち上らんとす、その袂を捕へた竹崎

竹「ち、父上さま、俄にみ氣色變じて何れへお越しなされます？」

太郎左衛門はその手をふり拂ひ、

太「ゑッ、知れたことを申せ、われは北條恩顧の武士、北面の輩者が帝を推戴しての

斯かる陰謀を聞くからには、躊躇し能はぬ今日の情況、暫時も早くこの事件を駿河守へ言上いたし、謀叛を企つ輩を根こそぎ取つて絶さん所存、」

竹崎愕き、

竹「ゑ？ さりとはお情けない父上さま、これほど呉れ〳〵も妾が願ひ申したことをお聞き入れなさのみならず、剰つさへこの大事を常磐（駿河守）様への言上とはこ、この一人娘が愍然とは思召し遊ばしませんか、」

太「いふ勿、娘、わが一族の些事をかへり見て、大恩ある北條家の一大事を忘却するほど愚なこの利行では無いは。」

竹「ゑ！そ、それぢや何うあつても……。」

太「お〳〵……！」

竹「宮軍のお味方を……？、」

太「お〳〵……！、」

竹「……お聞き入れ下さいませぬのみならず……。」

太「ゑッ、厥いッ……！」

と太郎左衛門は荒々しく盞を蹶立て〳〵行かんとす、竹崎再びその裾を啖乎と捕へ、

竹「く、口惜しい父上様、然うと知つたら斯う容易うは口外せぬものを、一度戰爭始まる曉には父と夫とは敵味方、それが悲しい許つかりに、父上さゑお味方に誘き入るれば、俱に別ちなき一家一族よと女の淺墓な考へから、この一大事をうち明けたのは、畢竟は夫に仇する基、いゑいゑそれのみなら未だ可いけれど、勿體ない天子様のおん身にまで及ぼす御難儀あゝ、何うしたらよいことやら。いま更何の顔下げて夫に合されやうせめてもの言ひ譯には、そうぢや、もうこのまゝ此處に、し、死ぬより外には……。」

と竹崎は氣も半狂亂、忽ちたしなみの懐劍を取り出し、あはや已が咽喉を突かんとす。

それと見るより手早く其手先を拂つた太郎左衛門、思ひ入れあつて、

太「早まるな、竹崎、女の汝一人が死せばとて、今更何の役に立つ、左程夫が愛しければ、何うぢや竹崎、この父を說いた口で、そちが藏人を當北條家の勇士たらしめては……、」

と太郎左衛門は耳に口寄せ、

太「な、判つたか、判つたら油斷るな。」

竹崎莞爾として嬉しき動作

この時次の間より

「うむ――つ……。」

と呻吟く聲起る、二人は愕然、

太「やあ。」

竹「あの聲は……」

とあはたゞしく、取合の襖を開くと、

こゝに左近藏人頼春諸肌ぬいでドッカと座し、小刀を脇腹深く刺し込むで切腹の體、鮮血は白き肌着を染めて、疊の上も一條のから紅。

斯くと見るより愕く太郎左、すり寄る竹崎

太「やあ、御身は藏人殿！」

竹「この淺ましき御姿は……。」

太「速まつたり左近氏。」

竹「傳へる事のあるものを……。」

太「二人が問答を立ち聞しての生害とは。」

竹「それもこれも皆妾ゆへのこと、何うぞ許して下さりませ、わが夫さま……。」

と竹崎すがり泣く、頼春僅に眼を開き、

左「いや〳〵決してそちの罪ではないは、思へば秘密を秘密とせざりしこの頼春が！生の落度、たとへこの身一つを害せしとて、この罪の消ゆるべうもあらねど、迚も世

に生きてあられぬ我身の境涯、心の中の苦しさはそなたも察して呉れるであらう。われ絆切れし後は未だうら若い身のそなた、今微かの明りを當に筆を染めたこの離縁狀を持つて、何處へ行くとも嫁ぐともおん身の勝手ながら、若しこの頼春が針の山路を思ひ出すことあらばせめて一片の回向をあげてくりやれ、それが我身に取りて何よりの罪亡し……。さ、舅御、いやさ、妻を離縁するからには、敵將齋藤太郎左衛門殿、御手數ながら息ある内に介錯頼み申す。」

太「よく言はれたり藏人殿、可惜勤王の武士一人に犬死さす老の心も御推察あれ。いでさらば、北條家の忠臣齋藤太郎左衛門利行が及に掛つて往生いたされよ。南無……。」

と扳き討ちに藏人の首を斬り落す。

と見るより竹崎は今はと許り、血に染みし夫の刀を取るより早く、

竹「頼春さま……。」

と咽喉に貫きて伏す。」

太郎左衛門はこの有樣を見て手の甲にて眼を掩ひしが直ぐ氣を取り直し、

太「おゝ適れなり竹崎、それでこそ人に恥ぢざるわが娘、この注進濟むからにはわれも遠からず冥途へ赴き、此世の緣に薄くとも、三人樂しくまたの世を送り申さん。さらば夫を斬つたるこの刀で汝も俱に、この父が介錯を受けて往生いたせ。」

といく度か躊躇ひつゝ漸うに介錯し了り、堪ぬ悲哀によろ〳〵と蹌跟めき斃れかゝるよろしく(幕)

(明治四十一年二月京都日出新聞所載)

喜劇

半獸主義

（此篇敢て泡鳴氏其他のおん方々を當てこすつたものに無之候へば豫め前以つて此段御斷り申上置候）

（一） 夢野浮橋下宿　（二） 辰巳うま子書齋

（三） ○○公園　（四） 再び夢野浮橋下宿

登場人名（青年投書家）

夢野浮橋　子丑寅卯

甘木みつ子　辰巳うま子

外に下婢二名

（一） 夢野浮橋下宿

下宿屋の二階、新しい六疊の一間。欅の机の上には五六冊の雜誌を積み重ね、陶

器の花瓶に萎れかゝつた桃の投げざし。何かの雜誌の口繪にあつた石版摺の裸體畫が一枚、側の壁にピンで留めてある他には、何等の裝飾もない。但し右手に押入あり、其中に夜具やら古雜誌一切ほり込みありと知るべし。

茲に夢野浮橋机に兩肘を突いて、新刊の「女子文學」の口繪にある女流投書家辰巳うま子の横寫し半身肖像に見惚れて獨り言。

夢「才色兩全とは全く辰巳うま子一人をのみ評すべき言葉だ。僕も青年文士に生れたからには希くは斯かる才媛を戀人として蜜のやうな香に醉つて見たい。わゝ僕は迷つた、チヤームせられた。花のやうなる君が色香に……。

この時子丑寅卯頭を蜻蛉のやうに光らして、ピカ〳〵する扮裝にて登場。襖を開けて入つて來たのも知らずに、夢野が空想に耽つてゐるのを見て、跡をそつと閉め、忍び足にて後ろに來り、立つたまゝに首を傾けて聞いてゐる。

夢「艶書を遣つて見やうか知ら、何だか氣恥かしいな。先方は出す度に撰に入らんこ

とのない秀才だのに、僕……はといへば大抵没書の憂き目を見る大文豪。拙い艶書ぢや却て色消しだ。あゝ何うしやうか知らん打付けに訪問するのも矢張り心が臆するし……然し、何うしても訪問するより外に手段はない、己惚ぢやないが僕の顔は先づ好男子といはれる側だから、或は一目見て先方が僕をラブするとなると……、うッふゝ、旨いなッ……。」

と不意に立上つて踊りかける。子丑は呆氣に取られて、ぽんと夢野の肩を叩き、

子「わッはゝゝ、オイ夢野君、何うしたんだ？、氣でも狂つたんぢやないか。」

夢野はけろりと我にかへり、

夢「ね？、誰だい？」

子「はゝゝ、誰だいもないもんだ、親友の子丑寅卯ぢやないか。」

夢「あゝ君か……」

子「君か、とは愕くねね、先刻から君の後ろに控へてゐたのだ。」

夢「さうか、ちつとも知らなかつた、少し考へてることがあつたもんだからね。」

子「あはゝゝ、少し位ぢやなからう、口に出して言ふほどだから……。」

夢「ね？口に出して……？」

子「ふゝゝ、色男、艶福家。ちよいと其雑誌を見せてみ給へ！」

夢「いや、これは……。」

といふなり机の下へ隠して了ふ。

子「ふん、見せられないのだな、よし、ぢや見ない、その代りにこれを見せたまへ！」

と傍にあつた日記（表紙に文士日記と刷り込んであるのなり）を取り上げる、夢野は慌てゝ、

夢「あッ、君、それは……。」

子「まあ可いぢやないか。……何、何、妙なことが書いてあるな、「戀か、戀か、敢て戀せしといふにあらざらんも、日々彼の女の姿を忘れかぬるぞ憂たてきことのかぎりな

れ。」か、はゝゝ、道に理想派は違つたものだ。これが三月五日だね！」

夢「君、もう止してくれ給へ！」

と矢庭に引奪ると、びりゝと音して子丑の手に一枚殘る。

子「旨いぞ。何だ今度は四月一日だな、いよう始めから終ひまで「辰巳うま子」ばッかりだ、よく熱心に書き詰めたものだな。」

夢「本當に君は殺生だなァ……。」

と泣き聲になる。

子「はゝゝゝ、これで全然君の獨り言の原因が分つた、ふゝゝ。君は其麼に辰巳うま子が戀しいのかい。君は未だ逢はないのだらう？」

夢「ぢやあ君は辰巳うま子を知つてるのか？」

子「僕が知らないで何うするかい、我々半獸主義者の代表者ぢやないか。」

夢「ふーん、僕は今まで知らなかつた。」

子「何うだい、それほど焦れてゐるのなら、一度御紹介の勞を執らうか。」

夢「願ひたいね。」

子「然し君がラブするとは、彼奴餘ッ程旨く化けよつたと見えるねえ。」

夢「え……？」

子「いえさ、君は何でゐの女を見たんだ？『女子文學』の口繪かい。」

夢「あゝ！」

子「鳥渡見せてみ給へ！」

夢野が悄然としながら渡すを、開いて見て、

子「はゝゝ、斯うして寫つてゐると中々美だねえ。醜な半面はちつとも見えずに……。」

夢「え……？」

子「いや、こつちのことだ、ぢや君行かう、今から直……。」

夢「今からかい、餘り急だなあ。」

子「善は急げだ。」

二人退場、道具廻る。

(二) 辰巳うま子書齋

辰巳家の奥まりたる離れの一室、お誂向の和洋折衷の室に、令孃うま子椅子に倚りながら、卓を前に控へて五六枚の寫眞を見競べてゐる。廂髪、金縁眼鏡その他ハイカラの扮装よろしく、肥つた體格の顔の黑い、右の頰から眼の下にかけて、赤茶色の腫物の跡あり、それを切つた故と見えて右の眼が釣り曲つてゐる。隅の方に置かれた硝子戸の本箱には、ダロース金文字入りがぎつしり詰つてあつて、壁には何だか神秘的な裸體畫が彼方此方に掛り、石膏製の裸體像や野獸なども、机の上や本箱の上に置かれてある。草花は一切無し。

うま子は寫眞を繰返し〳〵見てゐたが何れも是れも投げるやうに卓の上へ置くと

子「本當に碌な顔はありはしない、あた厭らしい、何の面も何の面も半獸だわ、いくら妾が半獸主義の作家だつて、男の顔まで獸臭いのは可厭だわ、馬鹿々々しい。こんな寫眞を贈つて妾と交際が出來ると思つてゐるんだらうか、さうだと本當に男なんて哀れな者だ。自分は嘸丹治郎以上の男振りだと己惚れて居るんだらうね、はゝゝゝ。でもまた妾を慕つて來る心根を思ふと、しほらしい所がある、妾の肖像が一たび「女子文學」に出ると、躍て妾の文章に渴仰して居つた幾多の青年詩人の胸が耐へ切れなくなつて、こゝに至つたのであらう。それが證據にはこの手紙の文を見れば判る、「……さはなくてさへ御艶文に心醉いたし居り候ものを、一たび優にやさしきお姿を拜し候ては……」などいふのもあれば、「……心も狂ひ身も狂ひ手の舞ひ足の踏ひ處を知らず、おん寫し繪に口つけ候て下顎のはづれし如くだら〳〵と、牛の涎の三千丈……」などいふ淨瑠璃の文句のやうなのもある。今朝からはまだ一通より來ないのだから、彼方へもう二三通は來てゐるに違ひない。さうだ、墨やを呼んで聞いて見やう！」

と柱にあるベルの鈕子を荒々しく押す、かけ違つて下女のお墨、戸を開けて手に

名刺を持つて來た。

う「あら、お墨かい、妾に手紙が五つ六つ來てゐないかい？」

墨「いゝえ、まだ參りません。――あのこのお方がお孃さんにお目にかゝりたいつてお見えになつて居ります。」

う「どれお見せ――夢野浮橋――一人は子丑さんだわ。墨や、夢野さんて何んな方？美い男？」

墨「あの、書生さんのやうな方ですけれど、鳥渡芝翫に似て居りますわ。お孃さんのお惚れ遊ばすやうな……。」

う「失敬なことをお言ひでない。ではねえ、お通し申しな。さつさと行つては不可いよ、道草喰ひながら玄關へおいで、其の間にお化粧するのだから……。」

墨「はい承知いたしました、何うぞこつてりお塗り遊ばしませ。」

う「何だい、失敬な！。奉公人の分際で……。」

お墨退場。うま子急いで机の抽匣から水白粉と粉おしろいと眉刷毛とを出し、慌てゝ眉刷毛を蓋を取つてあるインキ壺の上へ置いたのを氣付すに居る、水白粉を先づ顔へ一面に塗つて懷中鏡を鳥渡見る序に衣紋を直したり、頬べたを引張つたりしてゐる間に、早や廊下に足音が迫つて來る。氣が氣でなく眉刷毛に黑インキの付いてゐるのも知らずに粉おしろいを付けて顔へぬりくる、この時扉開く、うま子遂に鏡を見る間もなく、白粉や鏡を抽匣へ放り込んで了ふ。子丑寅卯先に立ち續て夢野浮橋登場。

子丑はうま子の顔を見て、噴き出しさうになつて來るのを僅に耐へる、夢野は顔ばかりぢやなく全體が寫眞版と違つて見えるので、笑ふどころでなく躊躇してゐる。

う「さ、何うぞ子丑さん、お入り下さい。貴郎も、さ、何うぞ此方へ。」

子「ふッふゝゝゝ……ふえッへん、ふえッへん。」

と噴き出て來るのを、子丑は漸く苦しげに咳に紛らして、

王「や、何うも風邪をひいて居りますので、失禮いたします、何うかお構ひなく。君、僕から紹介せう、うま子さん、これは僕の無二の親友で夢野浮橋といふのです、理想派の文士で、何うぞよろしく。さ、君、何とか挨拶したまへ！、君が豫々敬慕してゐるうま子女史閣下だ。」

夢「いや、これは初めまして、……。」

う「初めまして、以後よろしく御交際を願ひます、豫てお名前は承つて居ります、たしか『申聲』か何かで一二度拜見いたしましたやうです。」

夢「何うも恐れ入ります。」

王「君、そんな挨拶があるかい、もつと言ひやうがありさうなものだ。何うも君は訥辯でいかん。うま子さん、何分無口な方ですから惡しからず、然も心は女のやうに優しいのですから可愛がつてやつて下さい、底魂貴孃の御名文……のみならずお姿にも心酔してゐる一人ですから……。」

夢「君、もう可いぢやないか、さう有ること無いこと取り交ぜて言はなくても。」

王「いや、僕はちつとも無いことを言ふちや居らんつもりだ。君が是非紹介して呉れといふから、態々來たのぢやないか。」

夢「分つた、分つた、もう分つた。……時に君、僕鳥渡忘れてたことがあるから失敬する……。」

王「何だ、もう歸る？、そりや餘りぢやないか全で僕を愚弄……。」

夢「いや左樣ぢやないがね、ちつと許り腹も痛いし……。」

う「まあ貴方、およろしいぢやありませんか。御腹痛なら妾の方でお藥でもあがつたら可いでせう。」

夢「いゑ、宿へ歸つたら直ぐなほるのです。甚だ失禮いたしました。君、失敬するよ。」

夢野は猫の前を逃れた鼠のやうに倉皇として退場。

王「はゝゝゝ、貴孃の顏が餘り奇……いや綺麗だもんだから、彼奴面喰つて歸つて

了つた。何うも粗々ッかしい男で……。」

う「其麼こともありますまいけれども、矢つ張り妾の前へ來ると羞かしいのでせう、然し彼樣いふ訥辯な方は却つて實があるでせうね。何うも男のべちくちや囀るのは不可ません。」

子「いやはや、これは御挨拶痛み入りますね。」

う「何も貴方に當てこすつたのでは御座いませんよ。ほゝゝゝ。」

子「これから僕もちつと愼みませう、貴孃に嫌はれちやァ浮ぶ瀬がありません。」

う「中々貴君はお口が旨いわ、大抵の女なら迷ふでせう。」

子「……が、妾は迷はされんと云ふのですね。よろしい、別に惚れて貰ひたくもありません。貴孃のやうなおたんちんに……、」

う「ね？何ですつて？」

子「失敗つた！。いねなに、貴孃のやうな方は、僕の如きおたんちんに惚れて貰はなくつても、よろしでせう、と言つたのです。何うも訥辯だものですから、誤解され易くて困ります。」

う「ほゝゝゝ、急に訥辯におなりですねね、何とでも仰有いまし。」

と恨めしげな容子をするその顏付、子丑は身震ひしながら、

子「何んで僕が惡口を言ふものですか、全くその……何んでしたから。」

う「ほゝゝゝ。」

子「それは兎に角、時に貴孃は何かお書きになりましたか。」

う「材料はあるのですけれど、まだ執筆の運びに至りませんの！」

子「僕もです、何うも斯う世間が陽氣で、往來がぞろ〳〵すると、下宿なんかにひッ込んで居られません、向島へでも行つて、美人に採まれて見たくなるですね。それかといつて夏はそれ、直ぐ眠くなつてねね、愕いて眼を開いて見ると、知らぬ間に原稿は眞黑けになつてゐるといふ次第、本當に困つて了ひますよ、秋となると、何だか周

園が皆うら寂しくつて、僕のやうな散漫な頭にや、到底詩も何んにも出來やしません。冬は冬で、寒くつて手が凍けて、筆を持つ勇氣はとても出ません。」

う「おや〳〵、それぢや貴君は何時お書きなさるの、道理でちつとも貴君のお作を拜見したことがありません。」

ヲ「ところが、今度といふ今度は、短篇ですけれど、二十世紀の文壇を驚倒さすほどの大傑作を書くつもりなんです。題は「猫の戀」といふので……。」

う「趣向は……。」

ヲ「さあ、その越向を今考案中です、兎に角當今の題は奇拔なものでないと、歡迎せられませんからねえ、何しろ、露骨に肉感を描いて、大にデカダン的自然派の半獸主義を示さうといふのです。」

う「はゝ〳〵、拜見しない前の方が餘程面白さうですねえ。」

ヲ「これは〳〵恐縮です、何れ脫稿の上は、御添削を希はねばならんでせう。」

う「及ぶだけはお力になりませう。――ですが何時お越し下すつても何のお愛想もなくて、本當に失禮で御座いますねえ。ヴワヰオリンやピンポンは我々の主義に合ひませんから、勿論用意もありませんし……。」

ヲ「いや何うしまして、斯うして貴孃と雜談して居れば、僕は本望ですが、何んなら指相撲でもやりませうか、ヴワヰオリンやピヤノより大に半獸主義の本旨に叶つてゐるといふものです。」

う「はゝ〳〵、それも面白う御座いませう。」

と二人は椅子に腰掛けながら指相撲を始める。初のほどは默つてやつてゐたが、追々熱中するにつれて、大きな聲で、キヤツ〳〵と叫び出す。果ては立ち上つて姫御前とハイカラとか、あられもない大相撲、組んでほぐれつドタンバタン。この時下女お墨手紙を持つて入り來り、この有樣と、うま子の顏を見て、耐へ切れず、呆れながらも、

墨「おはゝゝゝゝ。

二人も漸く我にかへり、着物を直しながら、

子「あッはッはゝゝゝゝ。」

う「はッはッはゝゝゝゝ。」

墨「ふゝゝゝゝ。」

(三) ○ ○ 公園

朧に照す孤光燈の下、樹木、小山、四阿、ベンチはどよく並び一方が池の縁になつてゐる、總て公園地の夜景。夢野浮橋唯あるベンチに凭れて、何か空想に耽つてゐる。何處ともなく妙なるヒヤノの音聞ゆ。

夢「あゝ可厭だ、可厭だ。一週間の間、食物も碌に喰はず、痩せて窶れて、湯屋で體量を測つて見たら一貫三百八十七匁減るほどに、思ひ焦れたあの辰巳うま子が、あんな、あんな醜女——ではまだ言ひ足らぬ、惡女、劣女、駄女、愚女だらうとは、思ひ

もかけなかつた。子丑も子丑だ、あんな妖怪を僕に紹介する奴があるものか、失敬な、友達甲斐の無い男だ、子丑は知りつゝ僕を連れて行つたに違ひない、かついで慰むつもりなんだつた。さうだ、さう思ふと、何でも彼奴、あの日「女子文學」の口繪を見て、横から見れば中々美人だとか何とか言つてゐた。さうするとあの女、餘程奇妙な御面相に違ひないのだ、僕は案外思はくと違つてゐたものだから、實は篤くり見なかつたが、何でもかうお多福の面の出來損ひのやうだつた。それにつけても實に弱るなあ、あれから毎日〳〵三四通づゝも艶書をよこしくさる、わづか四日でもう十二通だ、いやはや惡女の深情け、難有迷惑千萬だ。あゝ思へばみつ子さんに氣の毒だつた、僕に惚れ切つてゐる人を棄てゝ顧みず、暫くでもあんな奴に迷つたかと思ふと、口惜しい、馬鹿々々しい。はゝゝゝ、人にも言はれやしない。よしこれから心を入れかへて、みつ子さんと理想のスヰートホームを造るやうに努めやう……。」

この間に、花道から辰巳うま子いそ〳〵と出て來り、夢野の居るを見て嬉しき動

作。何か心に首肯きながら、袂で顔を掩ひ、シク〳〵と泣き乍ら近づく。夢野の前まで來ると一層泣いじやくりながら、

う「あゝ〳〵、戀しい人は暖かに言葉一つかけて呉れず、戀せぬ人は毎日手紙をくれる。何故斯う儚い浮世だらう。いつそのこと……さうだ、もう死んで……死んで了はう……。」

夢野不圖その言葉を聞いて首を擡げる。若い女の姿を見て同情禁ずる能はず、死にかけたら助けてやらうと忍び足に跡をつけてゆく。女は泣きながら、池の縁まで行くと、石を拾つて袂の中へ入れる。軈て斯うよと見ゐたる時に、夢野は後から抱き留める。

夢「ま、待つた……。」

う「旨いつ！……」

夢「ゐ……？」

う「いゝゐ、何、何方か存じませんが、何うぞ離して下さいまし、迚、迚も生きてる甲斐の無い者で御座いますから……。」

夢「ま、ま、待ちたまへ！何んな辛いことがあるのか知らんが、短氣は損氣だ、死は易く、生は難しだ、僕が話を聞きませう、其の上で死なねばならんことなら、默つて死なしてあげるから——。」

う「何、何うしても生きちや居られませんので……、は、離して、離して……。」

夢「まあ、待ちたまへといふに……。」

無理に引つ張つて來て、夢野は近くのベンチに腰を下しながら、

夢「さあ、ま、お掛けなさい。そして貴孃が死なうといふ理由を聞きませう。」

う「……。」

夢「一たい貴孃は何處です？。」

う「あの、目、目白で……。」

夢「目白？、そ、それから……？。」

う「もう斯うなりましたら仕方が御座いません。御親切に甘えて、皆申上げますから何うぞお聞き下さいまし。」

うま子は袂の石を棄てゝ、顔を隠しながら、

う「あの妾は……青年文士間にはちつとは名を知られた閨秀作家で御座います。」

夢「はーん、貴嬢が閨秀作家？」

う「はい、左様でございます。で實はこの月のある雜誌に妾の肖像を掲げますと、參りましたわ、參りましたわ、妾を慕うて寫眞や手紙を寄越した狼連の痩せ文士が、無慮三百八十五名……。」

夢「はー、ゑーらーいものですなあ！」、

う「ですけれど、美い男つて實に少ないもので、それだけ集つた中に、妾のラブするやうなのが一人もありません、皆馬面か牛面かヒョットコ面ばかり……。」

夢「はーん。」

う「ところが七日の午後でムいました。前から妾とは主義を同じうして居りました可厭なハイカラの人と一に緒妾の宅をお訪れになつた一人の青年文士がありました。妾はその方を一目見ると、直ぐチャームせられて了ひました。躁々妾の理想とする所と一致したのでムいませう。が、その方は來ると直ぐ、用事を忘れたとか腹が痛いとかでお歸りになりました。」

夢「へゝー何んだか聞いたことがあるやうな話で……。」

う「あとで其のハイカラの人から聞きますと、その青年文士は矢張り妾の寫眞を見て焦れ扱いて被來つたんださうです。ですから妾はもう大空の星でも手に取つたやうな心持で、直ぐ長々しい艶書を送りました。」

夢「いよ〳〵これは怪しい。そのレターの中には裸體の男女がキッスしてゐる繪が入れてありませんでしたか。」

う「まあ、よく御存じでムいますねね。ところが貴君、梨の礫でいくら待つても返辭が來ませんものでしたから、妾はもう立つても座ても堪りません、それからは飽書の連發、暇さへあれば書いては出し、書いては出し致しましたから、まだ四日にしかなりませんのに十五通出しました。」

夢「おや〳〵、僕のところへは未だ十二通より來て居らんが……。」

う「それは貴君、あとの三通は郵便局を廻つて居るのでせう。」

夢「成程……。」

う「てもさても男といふものは無情な動物ですねね、この位に思つて居るものを一回の返辭も出さないとは……。妾もそれから、浮世がつく〳〵可厭になりまして、お差かしながら、今のやうな氣になりましたので……。」

夢「いやよく分りました。それで貴孃のお名前は……？」

う「あの……辰巳うま子。」

夢「ねッ……？」

と愕いて夢野避けんとする。つと其の裙を捕へたうま子は、孤光燈の光に透し見ながら、

う「おゝ、貴君は夢野さん！」

夢「桑原〳〵……。」

うま子は嬉し涙をはら〳〵と零して、

う「あゝ、矢張り貴君との緣は絶えないのでせう、これもキューピットのお引合せ！」

夢「何がお引合せなものか、斯うと知つたら助けるのぢやなかつた。」

う「ね、何ですつて？」

夢「後悔先に立たずか。」

う「何れ明日にもお禮に上ります。」

夢「いや態々お禮になんか來なくつてよろしいです。貴孃は大體、僕が無理に引き留

めたんだから、恨みこそすれ、嬉ぶことはちつとも無い譯ぢやありませんか。」

う「いゝ公貴君に留めて頂いたから、戀しい方にも逢へるのです、何んと仰有つてもお禮に參ります。實は是れまでに是非上りたいと思つて居りましたのですが、機會の無いのに上るのも妙なものですから扣へて居りましたのです。明日あたりは是非上ります！」

夢「いやはや、困つたもんだなあ……！。」

夢野悄然としてうま子を睨める、うま子勝ち誇つたといふ體で、

う「あはゝゝゝ、はゝゝゝ。」

（四）　再び夢野浮橋下宿

第一回と同じ部屋に火鉢を中に置いて、夢野悄然と小さくなつてゐる、此方には辰巳うま子威丈高。

う「さあ、何うです夢野さん、今日は何うしても色よい御返辭を聞かないうちは歸りません。三日分の食糧を用意して來ましたから……。」

夢「因りますなあ、然う無理な談判をされては。そんな强制で戀愛は出來やしませんよ。」

う「妾は半獸主義です、ぬら〳〵した海鼠のやうな應答は承知が出來ません。場合に依れば野獸の勢を振はぬとも限りません。」

夢「まあ然う短兵急に攻め寄せないで、兎に角お歸り下さい。篤くり考へて見て、手紙を差上げませう。」

う「いゝへ、可厭ですよ。先度から貴君は然う言つて何べん妾を追ひ返したか覺えて被居いますか。さあ今はイエスかノーか、二つに一つの御返辭をなすつて下さい。」

夢「……。」

う「さあ〳〵、イエスですか。」

夢「……。」

う「ノーですか」

夢「……。」

う「さあ！」

夢「さあ……。」

う「さあ、何ちらですか？。——イエスと仰有い。」

う「さあそれは……。」

う「ぢやあノーですか。」

夢「さあ……。」

と夢野が切迫詰つてゐる處へ、宿の下女お大來る。夢野は虎口を遁れた心地。

大「夢野さん、甘木さんが被居いましたが何うしませう。」

夢「惡い處へ來たなあ。……兎に角お通りと言つてお呉れ。」

お大退場、夢野咄磋に思ひ付き、

夢「うま子さん、甘木といふのは、その……僕の伯母なんですが、大變な頑固屋ですから、貴孃の被居るのを見れば、屹度そのまゝには置きますまい、今日は兎に角お歸り下さい。」

う「いゝえ、伯母さんだつてちつとも構ひません。お訊ねになれば妾は夢野さんの戀人ですと言ひますわ。」

夢「それが不可ないのです。貴孃の姿を見られちやあ、僕が困るばかりでなく、また貴孃によいお返辭をすることも出來なくなるでせう。それ然う言つてる間に跫音がします、困つたなあ、——窮屈でせうが、暫くこの中に辛抱してゐて下さい！」

と無理やりにうま子を、押入を開けて押し込み襖を閉めて了ふ、甘木みつ子温順しき被布姿にて入り來る。

夢「やあ、伯母さん——イヤみつ子さん、よく被來て下さいました。」

み「昨日はお手紙を有がたう。——まあ貴君に似合はない、取り散してありますね。

何方か被來つてるのですか。」

夢「いゑ今、友人が歸つたところです。」

み「嘘を仰有い、妾知つてますよ、女の方ですわ。下に綺麗な下駄が見ゑました、吃度あの下駄の主でせう。何處へお隠しなすつたの？」

夢「さう追究せられちや困りますなあ。實は女ですけれどねゑ、酷いおたんちんで、全く一目見て嘔吐を催すやうな奴です。」

み「はゝゝ、口で貶して心で褒めてゞせう。重寶なものですねゑ。本當に悪い處へ上つてお氣の毒でしたわ。」

夢「眞實です、嘘ぢやありません、これも文學上の交際で仕方がないのです。」

み「妾もう御免蒙りませうか知ら、御迷惑になつては不可ませんから。」

夢「そんな厭味を言ふものぢやありません、僕のスサートハートは貴孃一人です、でなさや手紙なんか上げはしません。兎に角今日は緩くりなすつて下さい、こゝに羊羹

もありますから、茶でも入れませうと。」

と机の抽匣から手のつけてない羊羹の包みを取り出して開き、ナイフで大きく切つて、茶を入れる。

夢「さ、一つお上りなさい。何うです此の間から出られませんでしたか？、僕は全く「やくやもしほの身を焦しつゝ」でしたよ。」

み「妾もよ、「あまりてなどか貴君の戀しかつたでせう」足はもうむづ〳〵してゐましたのよ、けれども何うしても出る折がありませんでしたの、妾もうこの三日間は、いかに久しきものと思ひましたでせう。」

夢「然うだらうと思つてました、貴孃のお家庭は嚴重のやうですからねゑ。けれども、嚴重だからそれだけ、苦心して逢へば餘計面白味があるのです。さ、遠慮なしにお食りなさい、餘り切りやうが大き過ぎましたねゑ、半分わけにしませう、序に茶も一つにしときますから、欲しかつたら飲み分けにしませう。」

と夢野が羊羹の切つたのを、また半分に分けてゐると、襖がガタ〳〵と、搖れる。

み「あらッ……！」

とみつ子が頓狂な聲を出すと、夢野ははつと思つたが、

夢「何うしたのです？」

み「怖ないこと、今ね、あの押入がゴト〳〵と鳴りましたわ……。」

夢「はゝゝ、われですが、猫が入つてるのですよ。」

み「まあ猫！、何うして？」

夢「なにね、あんまりこゝの猫が下で魚を取るものでから、懲しめの爲め入れてあるのです。」

み「さう、本當……？、でも何んだか呻吟き聲も聞えたやうでしたわ。」

夢「それはその……交尾期が來てゐるからでせう。」

み「まあ厭可だ、隨分自然主義の猫ね。」

この時また一際烈しき音押入の中に起ると、唐紙がさつと開いて、うま子團栗眼を刮と見開き、

う「馬鹿ぬかせッ。」

二人は魔消て、

夢「そーら交尾期の猫魔が……。」

み「ば、化けて出たッ……。」

と慌てゝドタバタ〳〵、階下へ遁げ降りやうとして、梯子段から脚を踏み辷らしドタンバタンドシンと轉げ落ちて二人折重なる。

うま子、つか〳〵と行つて睨めおろし、

う「斃死れッ……！」

と罵つて置いて急ぎ立ち戻り、そこにある羊羹を取つて、むしや〳〵と頬ばる。

う「旨い〳〵、わッはゝゝゝ——。」

明治四十一年六月十五日文庫所載

平和の劍

故 大脇市涙

戰ひ勝ちぬ、銃火はやみぬ
修羅の巷の戰場に
光る劍の影失せて
照る日も判かぬ朦々の
硝烟の掩ひ今解けつ
平和の世とはなりにけり
二歳前に彌增せる
譽耀々日のもとは

廣き世界に輝けと
自己わるゆへに起りては
永き戰爭に身に負ひし
黃金の創傷いかにせん
吁、いかにせん此負傷
自然に薄る香にわらず
拭きても取る〻汚染ならで
拂ひて落つる塵ならじ
癒すは一途、たゞ一途
爲きべき道を行へよ
實にも憫れよ日の本の

御國の民のその身上は
吾れ東洋の命主よと
誇れど胸奥は火焔の車
勵め、奮ひて怠らず
平和の劍振れよかし

（明治三十九年六月辰巳時報所載）

虹霓（太陽の戀）

せつなき戀の懊惱をば
說く時しもは紅涙落ち
下界に騷ぐ人類の
どよみ聞ゆるさこゑぬは
應答だになき君の胸中
姿見ゆれど無情きに
紅涙の雨ど降りそゝぎ
溜めし涙靈に涸れ果てゝ
借らなん術もなきまゝに
嗟嘆の太息ふと吐けば
怪しや大空に映ゆる彩色
赤、青、紫、黃、綠
我息は五つの彩かりて
示すわかれの煩悶をば

涸れし紅涙に變更りきて
赤、信實の血液を表し
紫、榮の衣服の色彩
青、純潔の胸中にして
綠、希望の未來しめし
黃、は殷富の黃金なす
悟らずや、日の戀人よ
無情き君の擧動ゆゑ
煩悶の吐息長ければ
冷い風の吹きもして
暫し凍りて虹霓となる
されど冷き動擧より
凍りし彩息の幸ならむ
そを五色に彩れる
反橋として來よ月の君
玉兎の顏渡り來よ
冷靜き汝の故鄕去りて
常夜の汝の領去りて
歡樂き運命君を待つ
常暖かき吾世に歸せ
戀人われを誰れと知る
錦襴の衣服を裝飾る身に

黄金の富の多くして
愛情も深厚く照しつゝ
光玉と黄光の輝けば
人類われを太陽とぞよぶ

（明治三十九年五月十五日文庫所載）

落日

日もすがら
烈しき業は暖さ
光輝にぶらせ情け濃さ
血しほもさめて衰殘の
なやみに堪ぬ日の神の
すゝびし形骸いたきつゝ
鳥啼かぬ
深山の奥の岩室か
さらずは蒼き八千潮の
遥の底ひに紅色の
珊瑚の林、太陽の殿堂は
そもや何處か識らねども
一日の
役勞は終へたりいざ宿所に
疲れし脚足を、喘きつゝ

いま漸くに六甲山の
峰にはたどり一息の
杖をやすめて佇めば
何者の
願とも判かず哀訴の
聲とも知らず何處ゆや
かすゝ咽喉に「わが父よ」
漏れ出る唇は血と汗の
かわけるさまに、たゆたひぬ
東か
西にもあらず天地に
みちし息の香は百萬の
生靈より起り沈みゆく
日の身體めぐりて「今暫し」
「暫し」とこそは悲しげの
口々に
わめきつゝはたわらそひつ
あまきにさそふあか蟻の
群集がるさまにかけ寄れど
はげしき業に疲勞れては
身は綿かともおとろへて
子をおもふ

心胸はあつくもゆるども
かへすに脚足は萎へはてぬ
兩眼はくもりわづらひの
泪は熱く「明日を待て」
心身はやゝにかくれゆく

萬人の
叫べる息は
あつまりて
黄なる天地の
森羅萬象を
いま曇らせぬ

身はなかば
峯にかくれて「さらばよ」と
日はふりかへり祈禱りつゝ
「子等僥倖あれ」とさながらや
黄金の孔雀誇りかに
榮ある尾羽をうちひろげ

天馳る
それにも似たり幾條の
後光は映り斑點雲
瑠璃玉と描かれ「汝等よ
願にせめてこの後光

したへ」とばかり、一しきり
夕の空は
また
明らみにけり

（明治四十年七月一日新聲所載）

花守

春は櫻の花に醉ひ
夏はあやめの色に染み
秋は黄菊の香を愛でゝ
冬は小松の精慕ふ

幸ある女、花守と
風姿に憧る人あらば
姑し袖ある衣すてゝ
菅笠かむる身としなれ

櫻の花の紅しとて
枝もたわゝに咲きゝそふ
さかりの頃は色艶めでゝ
訪ひ寄る人は多けれど
花永しへに花ならず
榮の七日の夢すぎて
面影痩せつ色散れば

あゝ衰殘の葉寒し

さらばあやめの紫の
みる目あやなるその色を
濃しとこそはのたまひそ
池の汀に咲きほこる
ゆかりの間こそ艶なれど
夏の眞晝の暑からば
濃き力もおとろへて
褪する色とは誰も知る

まして野もせに咲く菊の
八目休らに見ゆるとも
秋風さむくすさひとき
頼るすべなき一本の
身は果敢なくもた折られて
土にまみれば今更に
立たむ杖なきひとり居の
そぞろ侘しきながめかな

さても小松を何とせん
變るに遲き常盤木の
四時にたへぬ緑ながら
そも花さかず鳥啼かず

昨日の袖はもゝとせの
後も同じき乾燥の
無味なる生活思ひみて
ひそかに落す露の玉

朝、花野に肥料やりて
夕、清水をかくるとき
永きも十日短きは
露のひぬまの草花の
日々にうつらふ色みては
せめて一時も幸あれど
胸に泣きては眞清水の
いまひと杓をめくむ花守

（明治四十年四月一日新聲所載）

とむらひ

「葬式」と叫べる子等の面にも
愁は湧きぬ自ら歩みとゞめつ
來し道を振りかへりさま——行く
列ははやも目ぢかに迫りぬる。

行く主のこゝろをおもひそゞろに
も、涙ぐまれぬ幸うすき世にしあ

なれば、なさけ戀ふれなるものの、あるものゝ、あたたかみおぼえ、忘れぬる

忽ちに續く轍のことゝ〳〵と
耳にし入れば、そゞろなる夢より
醒めぬ
徐々ときしる俥に近親の
若き女も涙ぐむ。

海棠の艶姿はなけれど、蔦紅葉
清廉さが腰に、これはまた一つ雅

菊

紅交りの被布はさやかに、紫の、
愛らし——總は褪せずして

涙しぬ、葬送れる人も見る人も
ともにさびしき葬送のさまをし偲
び
暗愁に胸は閉せり——はろ〳〵と
降るは涙か五月雨

（明治四十年八月十五日文庫所載）

何？

小春日梅の花咲て

おもへば去歳の除夜なりき
灯さゝひき植木店に
代も僅にわがなひて
うつし植へたる針の梅

春一しきり花咲きて
床に小さきを飾りしが
いつし色香はうつろひて
細う殘りし梅が枝

朝な夕なの水かけも
また來ん春にうるはしく
潔白をひとに誇れよと
希望ははかにあらざりき

まだ夏の風のうすらぎて
秋立ちそめし神無月
訝かし鉢の梅が枝に
小さき蕾はかたちしぬ

やゝにふくらひ小春日や
白き笑顔の見え初めて

匂は高き花瓣の
ならびて枝に開きけり

置きしは温室にあらずして
甍のうへの雨ざらし
日毎にやりしぬる水も
今日咲けとにはなかりしを

梅はやさしき雛ぶりに
季節をちがひてよそはひぬ
みる人毎に奇とさけび
われも眺めて奇を思ふ

何の點示とかへりみる
疚しさもてる身ならねど
花のきよきをねがひては
そゞろこゝろを戒むる哉

（明治四十年十月京都日出新聞所載）

蓄音機

戀しき日
つと取り出し耳にあつ
蓄音機——
「わしの病はいま重い

あゝもう一度治つて
未練ぢやないが、行てみたい
去年のやうな茸狩り……」の
その日思へばものみなは
夢に夢みるかたちして
知るは戀しき涙かな

淋しき日
つと取り出し耳にあつ
蓄音機——
「親に別れた獨り者
優しきなたと緣あつて

結婚の式げ擧たのも
つい此間のやうだのに……」
はやも別るゝ運命とは
知らずにありし人の世を
思ひ、さびしき涙のみ

悲しき日
つと取り出し耳にあつ
蓄音機——
「まだうら若い身のそなた
わたしが死なば寂しかろ
誰に遠慮もいりはせん